



True Colors Festival 2024 新フェーズ初年度の効果検証に係る助言 報告書

タメントイ合同会社
2024年6月4日

目次

1. 評価目的の意義	P.5
1 – 1. プロジェクト実施目的に関する合意形成	P.6
1 – 2. ロジックモデルの作成	P.12
1 – 3. KPIの定義	P.15
2. 評価計画の策定	P.18
2 – 1. アウトカムの測定方法	P.19
2 – 2. スケジュール作成	P.21
3. 評価の実施	P.23
3 – 1. アウトカムに対する評価	P.26
3 – 2. 評価プロセスに対する評価	P.66
3 – 3. イベントに対する評価	P.68
APPENDIX 1 : プロジェクトの進め方	P.78
APPENDIX 2 : 気づきの構造理解	P.81
APPENDIX 3 : 期中・期末におけるアンケート及びヒアリングデータ	P.84
CREDIT	P.85

エグゼクティブサマリー I

本プロジェクトのサマリー

1 評価目的の 意義	1-1 プロジェクト実施目的に 関する合意形成 P6	プロジェクトでは、障害がある/ない学生が参加する“True Colors DANCE 2024”を通じ、もたらされるインパクトを評価する。あらゆる関係者が得る「気づき」をインパクトと捉え、いかなるインパクトがあったのかを明らかにし、本事業の創出価値を測る。そこで、まずは気づきの構造を理解し、 主要関係者とのワークショップにて今回もたらしたい気づきの定義の共通認識を醸成、合意形成を図る
	1-2 ロジックモデルの作成 P13	プロジェクトの目的やもたらしたい気づきの内容を踏まえ、 目的に到達するまでの変化の連鎖（ロジックモデル）を描く 。ロジックモデルでは、今回事業を通じて得られる変化（アウトカム）を関係者ごとに設定する。D&Iを軸としたプロジェクト目的を鑑み、人対人の気づきを考慮したD&I文脈のモデルにする
	1-3 KPIの定義 P16	アウトカムを測定するため、 主要なアウトカム毎にKPIを定義する 。一時的なものではなく、持続的な気づきを創出するために、 気づき導出の仕掛け、導出、内包、持続、促進など各観点を整理し、気づくうえで鍵となるチェックポイントを明確化する 。ポイントに従い、 重要な変化を測るためのKPIを検討する
2 評価計画の 策定	2-1 アウトカムの測定方法 P20	アウトカム測定方法としては、アンケート及びヒアリングを採用する。アンケートでは、 整理・体系化された質問によりSHにもたらされた重要な変化を一律に測定する一方で、ヒアリングでは、一律の質問項目ではキャッチしきれない個々人の変化について深掘する
	2-2 スケジュール作成 P22	アウトカム測定はプロジェクト前、期中、期末の3回に分けて行う。 プロジェクト前後2回の測定では看過してしまう変化についても、期間中にアウトカム測定することで、変化の経過を追えるようにする
3 評価の実施	3-1 アウトカムに対する評価 P27	次頁：エグゼクティブサマリー II を参照
	3-2 評価プロセスに対する評価 P67	
	3-3 イベントに対する評価 P69	

*SH：ステークホルダー

エグゼクティブサマリー II

【3：評価の実施】のサマリー

<p>3-1</p> <p>アウトカムに対する評価</p> <p>P27</p>	<p>期中の変化</p> <p>+</p> <p>期末の変化</p>	<ul style="list-style-type: none">□ 設定したアウトカムのすべてにおいてポジティブな変化が認められた。気づきをもたらすためにプログラム上設計された工夫が効果を発揮し、特にアイスブレイクや手話通訳、振り返りミーティングによって学生らに気づきをもたらされた。インストラクター/メンターにおいても、学生らの交流活発化に対する肯定的気づきがあった□ 一方で、期中で見られた気づきの特徴としては、当初抱いていた不安感や緊張、これまでの先入観や固定観念を取り払う初期的な気づきなどが多く散見される□ 期中と同様に、総じてポジティブな変化が認められた。共にした時間や互いの接触回数に比例し、深化した、また追加的な気づきが見られた。例えば、互いの関係性、自身の固定観念から脱し、相手を尊重した交流方法といった歩み寄り、手話やダンス等のテーマで更なる挑戦を続ける意思への気づきなどが該当する□ インストラクター/メンターにおいてはプログラム設計や工夫に関する気づきが見られ、保護者においてはイベントを契機とした会話量の増加や、子の持つ不安や課題感の認識が認められた
<p>3-2</p> <p>評価プロセスへの評価</p> <p>P67</p>	<ul style="list-style-type: none">□ 今回の評価にて採用したアンケート、ヒアリングでは、データ取得網羅率に課題が認識される。取得網羅率がやや低いために、分析結果は大勢を表すものでなく、一部意見に留まる結果になっている□ 期中ヒアリングでは、学生回答者がイベントに集中する中、ヒアリングの時間・心理的余裕がなく回収率が低かった可能性や、有志を対象にしたため低回収率になった可能性がある。期末アンケートでは、質問ラインナップに関する反省点はあるものの高回収率を達成。検証精度向上のための工夫が今後の課題である	
<p>補足</p> <p>3-3</p> <p>イベントの評価</p> <p>P69</p>	<ul style="list-style-type: none">□ 来場者アンケートによれば、その9割がTCFを初めて知った人であり、TCFの認知拡大に大きく寄与している。特に男性アイドル等を招いた出演者ラインナップの工夫により、女性の20~50代が多い傾向にあると推測する。イベントに対する満足度は概して高く、“出演者目当て”に注目して“今回初めて来場”のターゲティング層にリーチし、D&Iに関する何かしらの気づきを与えることができたと言える□ 一方で、改善点は大半が運営に関する内容であり、TCFのテーマや考えへの批判は見られなかった	

1. 評価目的の意義

1 – 1. プロジェクト実施目的に関する合意形成

本プロジェクト実施の背景と目的

背景

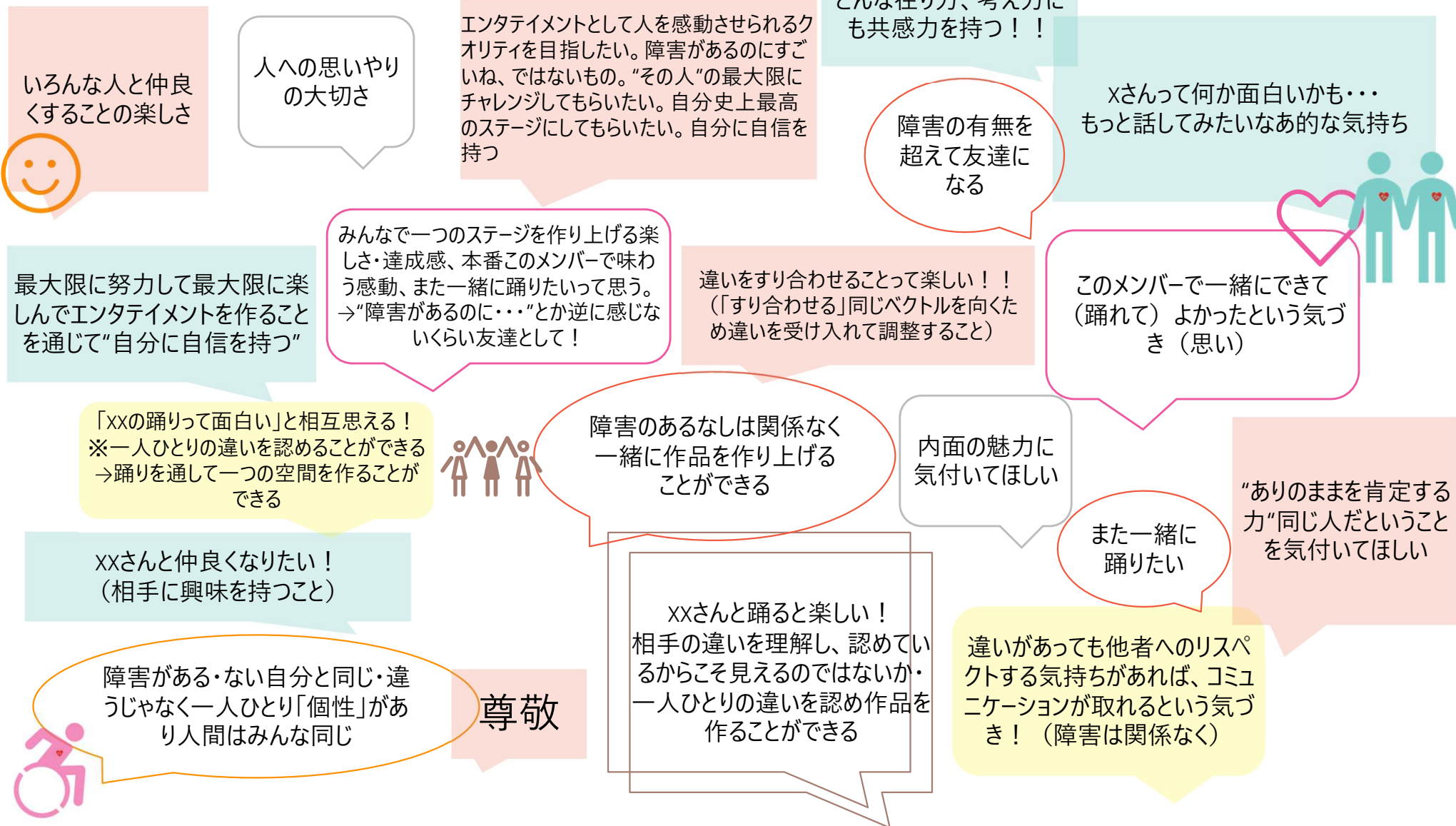
- 障害がある方が持つ可能性を見つける・広げるため、貴財団では、障害のあるアーティストがステージ上で表現をする機会をつくり、様々な人に鑑賞してもらうことで、障害に対する意識の変化や自立に向けた後押しを推進してきました
- 近年では、表現者と鑑賞者が空間を共にすることで生み出される意識や視点の変化に着目し、障害・性・世代・言語・国籍など多様な個人の違いを超えたコラボレーションをTrue Colors Festival やその他事業にて体現しています
- 一方で、これら事業を通じて創出される価値や事業全体としてのインパクト、つまりはこの事業でできることを理解することは、貴団体においても整理が十分にできていない現状があります
- そこで、障害がある/ない学生による「True Colors DANCE 2024」を通じ、あらゆるステークホルダーが得た「気づき」に着目したインパクト評価の実施を試行することとなりました

目的

- まずは、気づきに対して構造的な理解を深めたのち、今回事業でもたらしめべき気づきの定義を整理し、参加者が気づきを得られるような事業となるよう戦略的に工夫ポイントを導出します。そのうえで、ロジックモデルを用いた評価設計および評価を実施します
- 具体的には、以下の3点の作業を実施します
 1. 評価目的の意義に関する認識合わせ
 - 「気づき」のワークショップ開催：
今回事業にてステークホルダーへもたらしたい気づきの定義、気づき導出チェックポイントの明確化
 - 今回事業のSHや方向性を踏まえたロジックモデル構築
 - KPI定義
 2. 評価計画の策定
 - アウトカム測定方法検討
 - スケジュール作成
 3. 評価実施
 - データ分析により、今回事業成果を評価

気づきの内容を考えるワークショップを通じ、「高校生たちに、どんな“気づき”を持ってもらおう？」を考え、制作・企画やアーティストの参加者みなさまより様々な意見をいただいた

気づきのWSでみなさまよりいただいたご意見の抜粋



〔ご参考〕True Colors DANCE 2024の企画制作に携わる主要関係者に、気づきの内容を考えるワークショップにご参加いただいた。組織及びご参加者は以下の通り

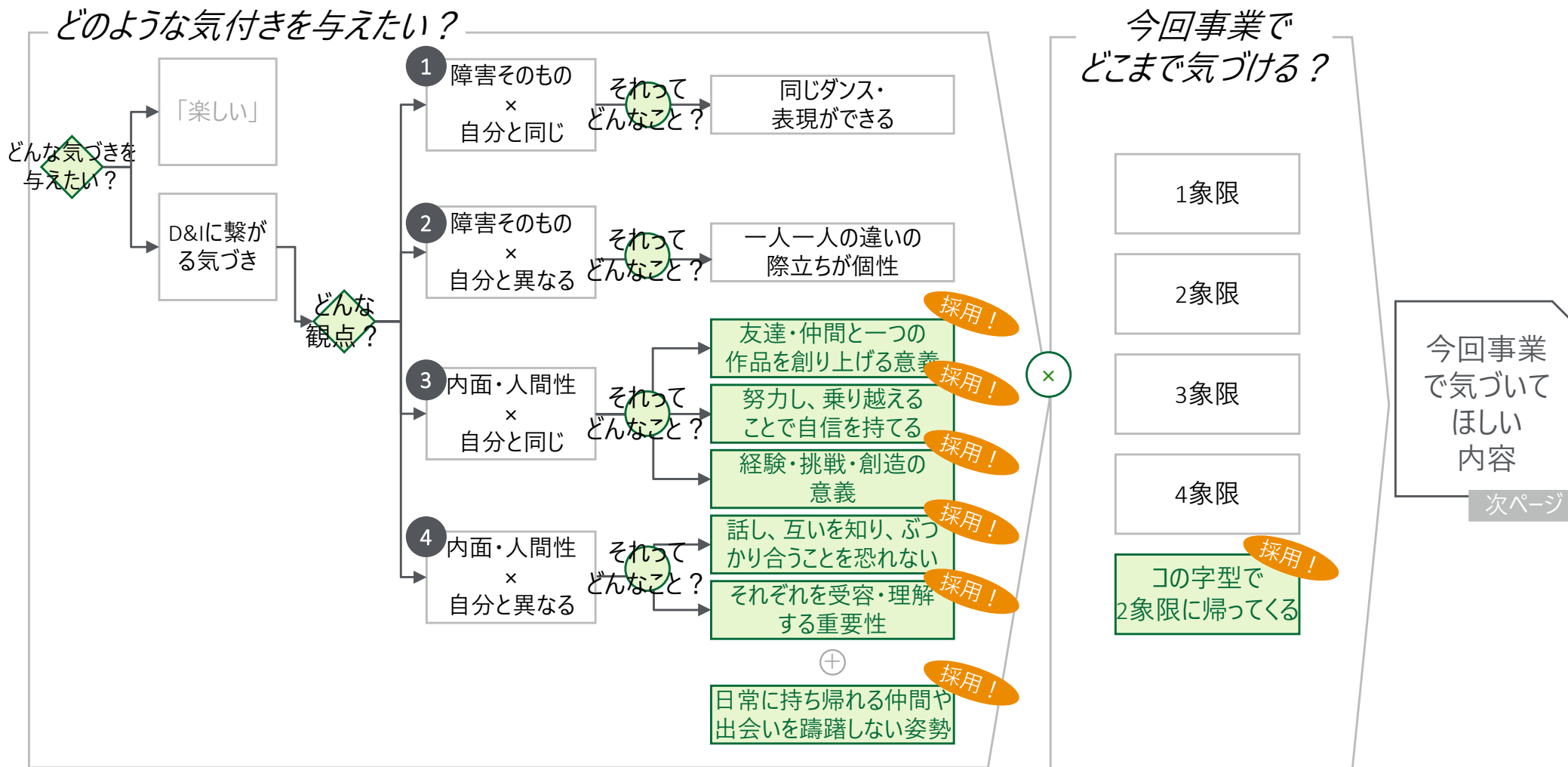
気づきのワークショップ ご参加者

組織名	日本財団 DIVERSITY INTHEARTS	SOCIAL WORKEERZ	ODORIBA	ASOBISYSTEM
True Colors DANCE 2024における役割	イベント企画・統括	ダンスインストラクター/ メンター	ダンスインストラクター/ メンター	イベント制作協力
人数	3名	5名	5名	1名
組織概要	<p>障害をはじめ多様なちがいがまじわるインクルーシブ社会の実現を目指し、障害者と芸術文化の領域で事業を行う。今回企画含め、障害のあるアーティストと創るパフォーマンスアーツを発信</p> <p>「Danceで福祉をデザインする」「Dance for social inclusion」をテーマに掲げ、ダンスや音楽を通じて理屈や言葉ではないコミュニケーションでみんなが楽しめる空間を提供</p> <p>ダンスに特化したエンタテインメント・クリエイティブエージェンシー。「ダンス」の価値向上を目指すとともにダンサーが「アーティスト」「クリエイター」として活躍する場（踊り場＝ODORIBA）を創出</p> <p>MADE IN JAPANのコンテンツをサポートし、新たな「アソビ」を創造するカルチャープロダクション。人や街が生む熱量と向き合い、エンタテインメントの力で人々の心に残るコンテンツを国内外へ発信</p>			

合意形成
1 評価目的の意義
ロジックモデル
メモ
アウトカム測定
2 評価計画策定
スケジュール
アウトカム
3 評価実施
評価プロセス
イベント

WSの結果、特に内面・人間性への気づきを重視しつつ、4象限すべてをカバーするように気づきの内容を定義する、という方向性で進めることを決定した

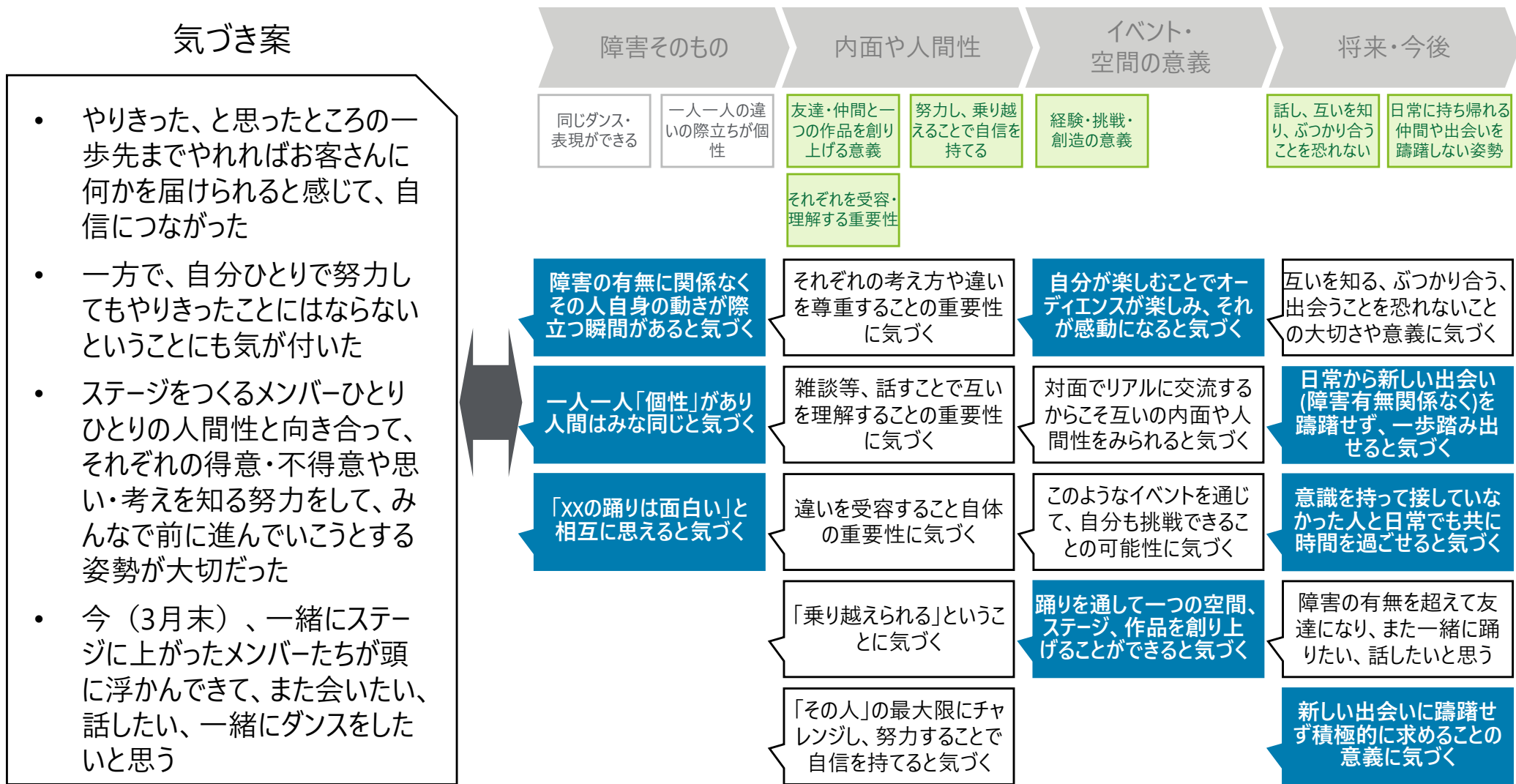
気づきの内容定義に関する議論の流れ



気づき案を最終確定するうえでは、気づき案とみなさまのコメントを照合し、何を捨て（劣後させ）、何を重視しているかを確認

DITA事務局案 | 気づきの内容の整合

... 案に含まれている要素
 ... 案に含まれていない要素



▶▶▶ 障害そのものの気づきや作品を作り上げること、将来の新しい出会いは入っていない！

合意形成
 1 評価目的意義
 ロジックモデル
 2 評価計画策定
 スケジュール
 3 評価実施
 アウトカム測定
 アウトカム
 アウトカム
 評価プロセス
 イベント

そのうえで、今回プロジェクト主催者が、プログラムを通じて、高校生に与えたい気付きとして共通目標を持つために、1パラグラフで表現する作業を行い、気づきの内容を確定

【まとめ】気づきの内容：確定版

やりきった、と思ったところの一步先までやればお客さんに何かを届けられると感じて、自信につながった

一方で、自分ひとりで努力してもやりきったことにはならないということにも気が付いた

ステージをつくるメンバーひとりひとりの人間性と向き合っ
て、それぞれの得意・不得意や思い・考えを知る努力を
して、みんなで前に進んでいこうとする姿勢が大切だった

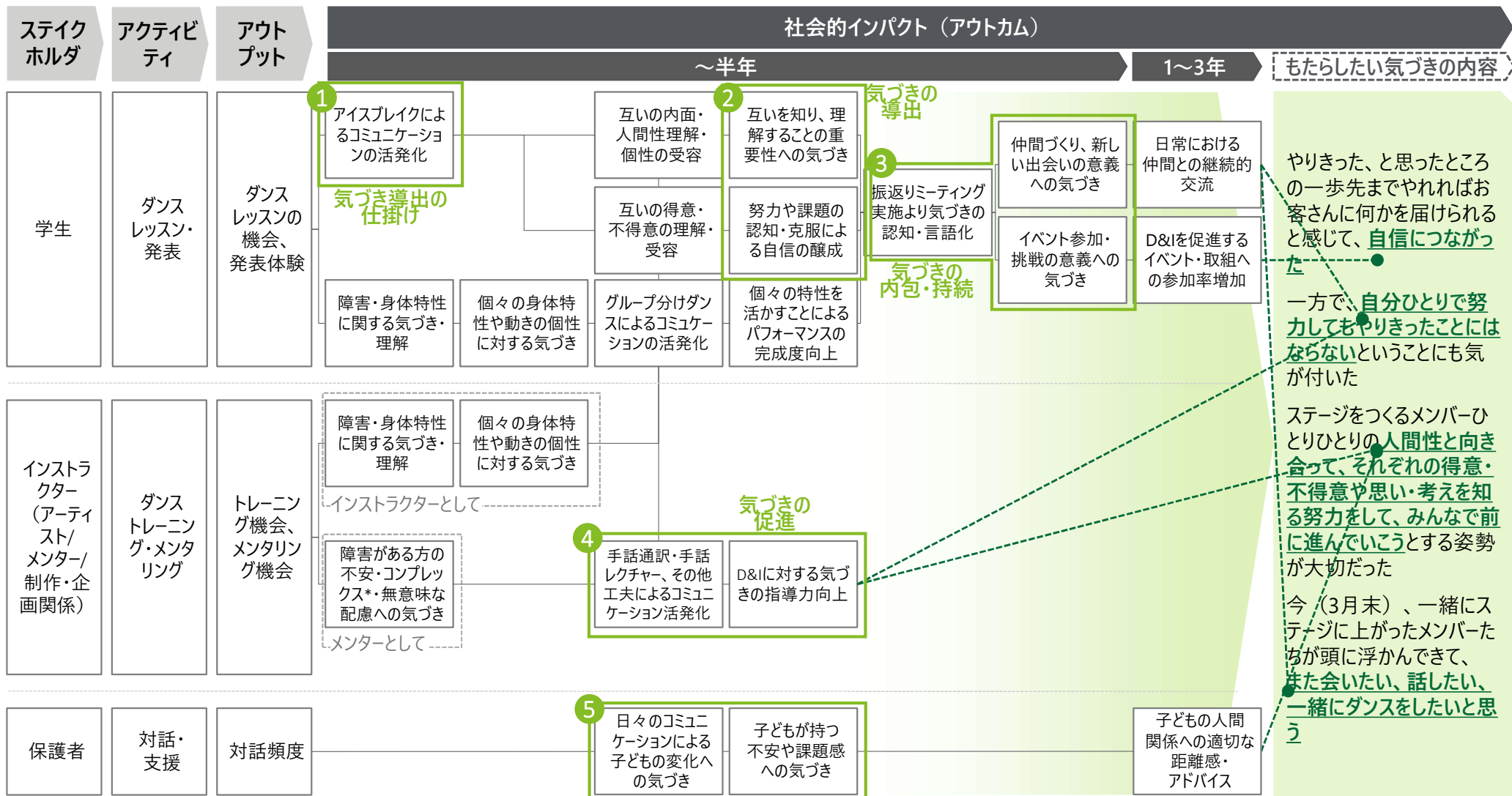
今（3月末）、一緒にステージに上がったメンバーたちが
頭に浮かんできて、また会いたい、話したい、一緒にダン
スをしたいと思う

1 – 2. ロジックモデルの作成

確定したもたらしたい気づきの内容（事業目的/インパクト）に至る変化の連鎖を描画し、今回事業を通じて得られる変化（アウトカム）を整理、明確化

今回事業のロジックモデル

X チェックポイント
 □ アウトカム



*コンプレックス：

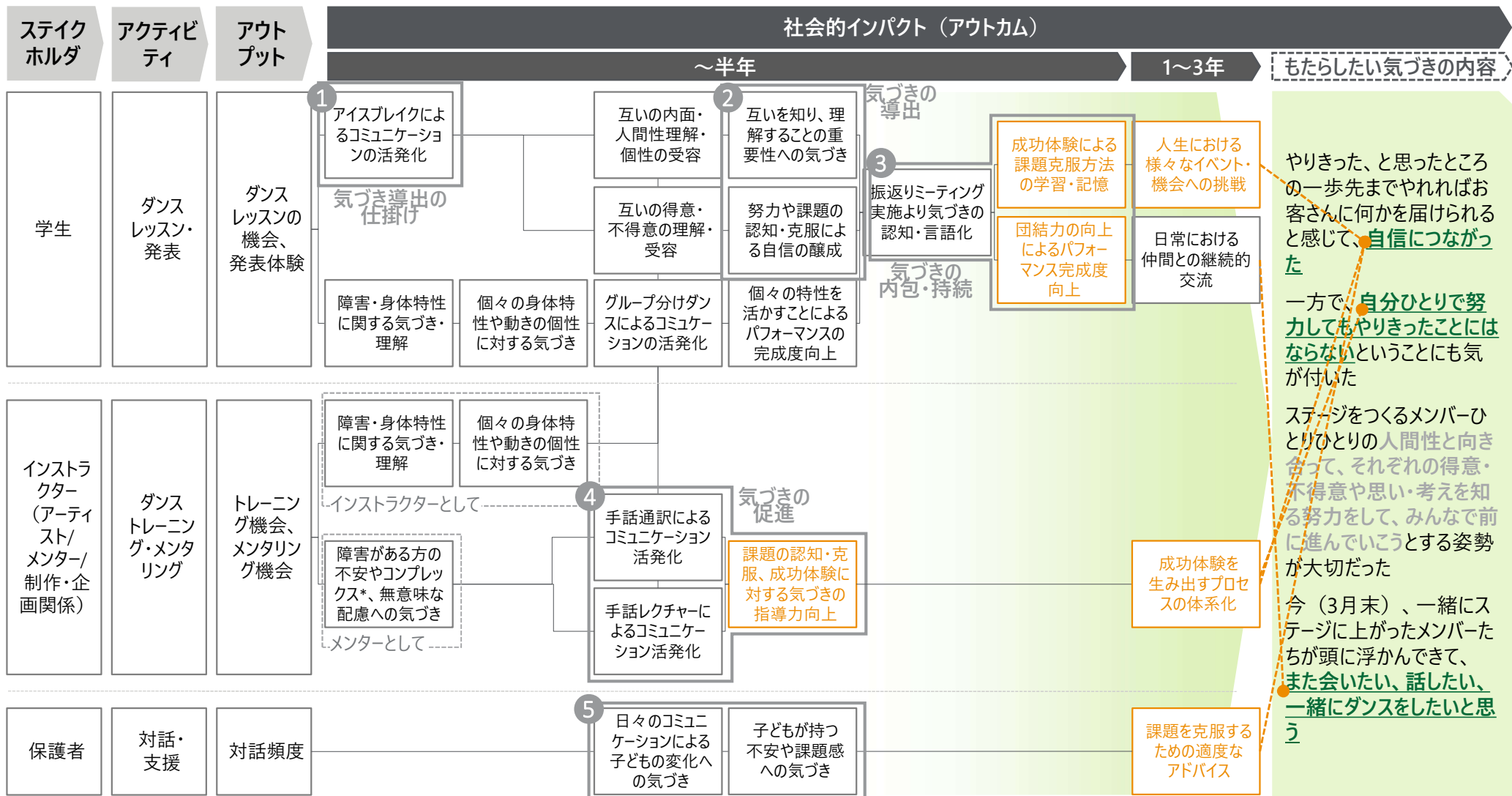
①ダンススキルに対するコンプレックス、②障害の有無に対するコンプレックス

合意形成
 1 評価目的の意義
 ロジックモデル
 2 評価計画策定
 アウトカム測定
 スケジュール
 3 評価実施
 アウトカム
 評価プロセス
 イベント

〔ご参考〕D&I文脈ではなく、一般的なイベントやスポーツを想定したロジックモデルの場合、成功体験の創出や課題の克服等に完結し、人対人に関して得られる気づきが少ない

ロジックモデル（D&I文脈でないバージョン）

- 前項からの変更点
- X チェックポイント
- アウトカム



*コンプレックス：
①ダンススキルに対するコンプレックス、②障害の有無に対するコンプレックス

合意形成
1 評価目的意義
ロジックモデル
2 評価計画策定
アウトカム測定
スケジュール
3 評価実施
アウトカム
評価プロセス
イベント

1 - 3. KPIの定義

各アウトカムを測定するKPIを設定する。運用管理面での負担等を鑑み、①KPI設定数、②“変化”を捉えるアウトカムの優先、③外部からの理解を得やすいアウトカムの優先で設定

KPI選定の考え方

- ① 運用管理面での負担を鑑み、KPIを最大5つ設定

少なくとも3つ、多くて5つ程度を想定。一方のアクティビティに偏らないようバランスの取れたKPI設定を行う
- ② “実施した結果”としてのアウトカムではなく、“変化を捉える成果”としてのアウトカムを優先

例えば「実施回数」ではなく、活動の結果創出された変化量として「理解度」や「実践頻度」など優先して選定
- ③ 公表した際に外部からの理解を得やすいアウトカムを優先

外部公表した際に、外部より理解を得やすい評価結果・成果などを優先
- +
- ④ 貴財団が特に重要だと考えるアウトカムを優先

上記に加え、貴財団が特に重要であると考えられるアウトカムをご教示いただき、KPIを選定する

インパクト創出のキーとなる5テーマに基づき、各アウトカムを測定する。 測定に必要なKPIを設定するうえでは、各検討論点を踏まえることが重要

KPI設定上の検討論点

チェックポイント	テーマ	アウトカム	KPI設定上の検討論点
1	気づき導出の仕掛け	アイスブレイクによるコミュニケーションの活発化	アイスブレイクによるコミュニケーション量の増加に伴うコミュニケーション活発化の意識変化があるか
2	気づきの導出	互いを知り、理解することの重要性への気づき	互いを知り、理解することの重要性に対する意識の変化があるか
		努力や課題の認知・克服による自信の醸成	努力、課題の認知・克服による自信の醸成があるか
3	気づきの内包・持続	振り返りミーティング実施より気づきの認知・言語化	振り返りミーティング実施による、気づきの認知・言語化がなされたか
		仲間づくり、新しい出会いの意義への気づき	仲間づくりや新しい出会いの意義に対する意識の変化があるか
		イベント参加・挑戦の意義への気づき	イベント参加・挑戦の意義に対する気づきの有無、意識の変化があるか
4	気づきの促進	手話通訳・手話レクチャー、その他工夫によるコミュニケーション活発化	手話通訳やレクチャー・その他工夫によるコミュニケーションの活発化に対する意識の変化があるか
		D&Iに対する気づきの指導力向上	一人一人の外見的・内面的違いを個性と捉えるような気づきが醸成されている意識があるか
5	前向きな気づきのサポート	日々のコミュニケーションによる子どもの変化への気づき	日々のコミュニケーションによる子どもの変化への気づきがあるか
		子どもが持つ不安や課題感への気づき	子どもが持つ不安や課題感への気づきがあるか

合意形成
1 評価目的の意義
ロジックモデル
2 評価計画策定
アウトカム測定
スケジュール
3 評価実施
アウトカム
評価プロセス
イベント

2. 評価計画の策定

2 - 1. アウトカムの測定方法

アンケート及びヒアリングによりアウトカムを測定。アンケートでは整理・体系化された質問によりアウトカムを一律に測定。ヒアリングでは、個々人の変化・気づきを丁寧にキャッチ

アウトカム測定方法

一部再掲

チェックポイント	テーマ	アウトカム	モニタリング			KPI設定上の検討論点
			期中ヒアリング	期末ヒアリング	期末アンケート	
1	気づき導出の仕掛け	アイスブレイクによるコミュニケーションの活発化	✓	✓	✓	アイスブレイクによるコミュニケーション量の増加に伴うコミュニケーション活発化の意識変化があるか
2	気づきの導出	互いを知り、理解することの重要性への気づき	✓	✓	✓	互いを知り、理解することの重要性に対する意識の変化があるか
		努力や課題の認知・克服による自信の醸成				努力、課題の認知・克服による自信の醸成があるか
3	気づきの内包・持続	振り返りミーティング実施より気づきの認知・言語化	✓	✓	✓	振り返りミーティング実施による、気づきの認知・言語化がなされたか
		仲間づくり、新しい出会いの意義への気づき				仲間づくりや新しい出会いの意義に対する意識の変化があるか
		イベント参加・挑戦の意義への気づき				イベント参加・挑戦の意義に対する気づきの有無、意識の変化があるか
4	気づきの促進	手話通訳・手話レクチャー、その他工夫によるコミュニケーション活発化	✓	✓	✓	手話通訳やレクチャー・その他工夫によるコミュニケーションの活発化に対する意識の変化があるか
		D&Iに対する気づきの指導力向上				一人一人の外見的・内面的違いを個性と捉えるような気づきが醸成されている意識があるか
5	前向きな気づきのサポート	日々のコミュニケーションによる子どもの変化への気づき	-	-	✓	日々のコミュニケーションによる子どもの変化への気づきがあるか
		子どもが持つ不安や課題感への気づき				子どもが持つ不安や課題感への気づきがあるか

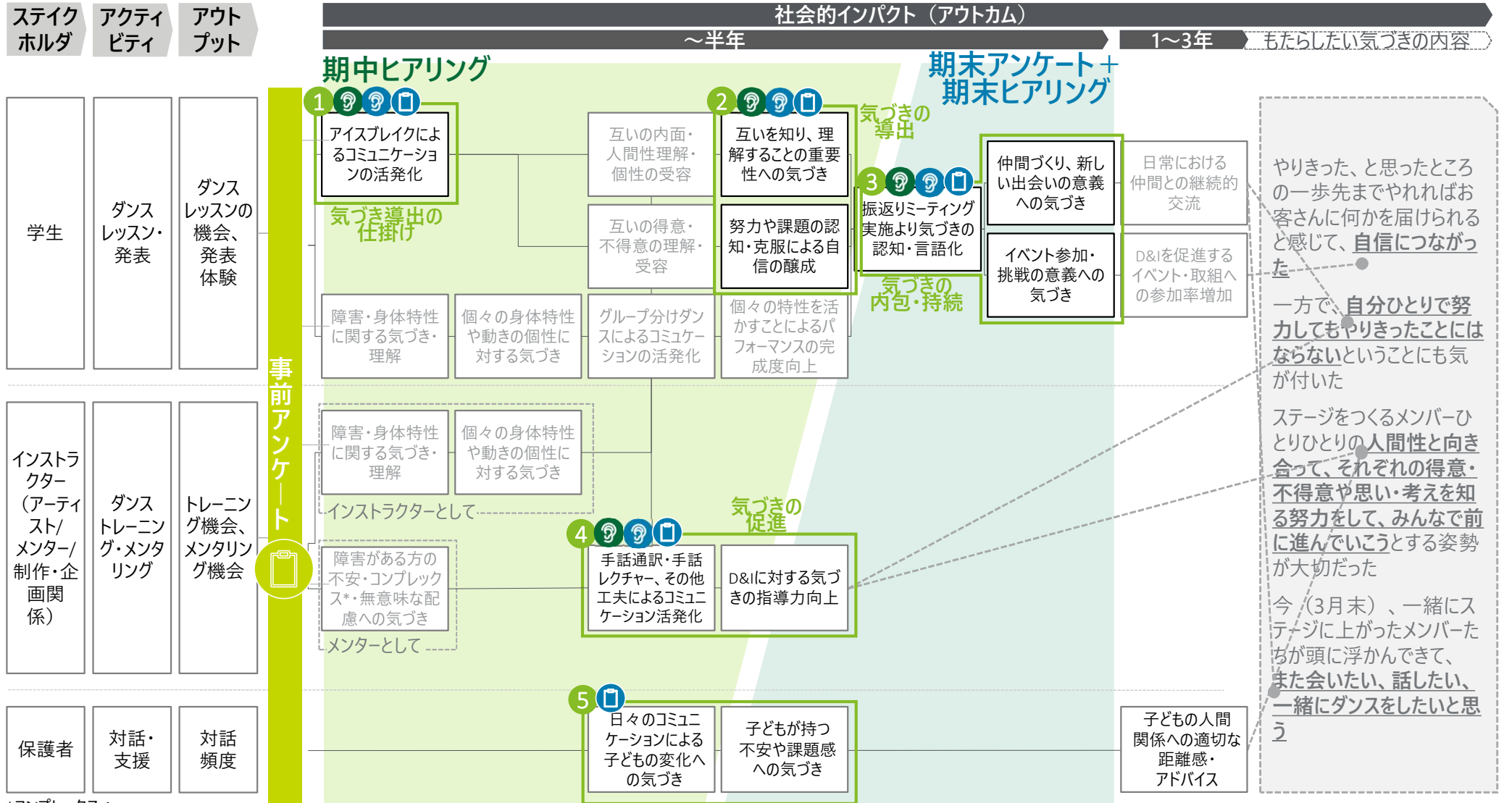
合意形成
1 評価目的意義
ロジックモデル
2 評価計画策定
アウトカム測定
スケジュール
3 評価実施
アウトカム
評価プロセス
イベント

2 - 2. スケジュール作成

PJ開始前のアンケート、期中におけるヒアリング、期末におけるヒアリング・アンケートのスケジュールでアウトカムの測定を実施。期間中も測定することで変化の経過を追う

アウトカムの測定方法

🗣️ ヒアリング チェックポイント
📄 アンケート アウトカム



*コンプレックス：

①ダンススキルに対するコンプレックス、②障害の有無に対するコンプレックス

合意形成
1 評価目的意義
ロジックモデル
2 評価計画策定
アウトカム測定
スケジュール
3 評価実施
アウトカム
評価プロセス
イベント

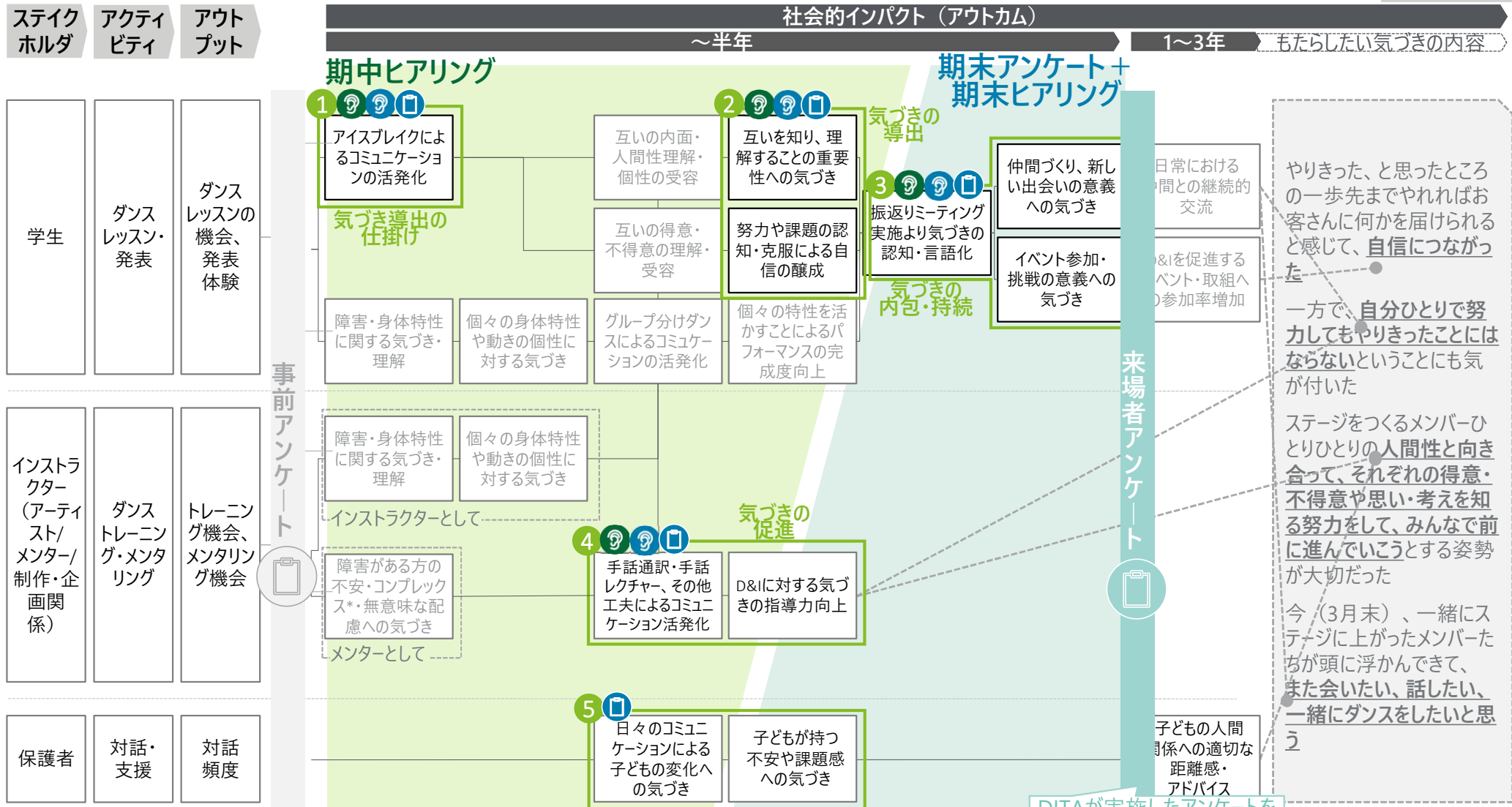
3. 評価の実施

期中ヒアリング、期末ヒアリング・アンケートにてアウトカムの測定を実施し、気づき、変化の創出を確認。加えて評価プロセス自体を振り返り、補足的に来場者アンケートの分析も実施

アウトカムの測定

🗣️ ヒアリング X チェックポイント
📄 アンケート アウトカム

再掲



*コンプレックス：
①ダンススキルに対するコンプレックス、②障害の有無に対するコンプレックス

やりきった、と思ったところの一步先までやればお客さんに何かを届けられると感じて、**自信につながった**
 一方で、**自分ひとりで努力してもやりきったことにはならないということにも気が付いた**
 ステージをつくるメンバーひとりひとりの**人間性と向き合って、それぞれの得意・不得意や思い・考えを知る努力をして、みんなで前に進んでいこうとする姿勢**が大切だった
 今（3月末）、一緒にステージに上がったメンバーたちが頭に浮かんできて、**また会いたい、話したい、一緒にダンスをしたいと思う**

DITAが実施したアンケートを補足的に評価・分析

合意形成
 ロジックモデル
 2 評価目的意義
 2 評価計画策定
 3 評価実施
 アウトカム測定
 スケジュール
 アウトカム
 評価プロセス
 イベント

期中・期末におけるヒアリング・アンケートにて、アウトカム測定データを採取。ポイントとして、ヒアリングにおいては回答者の属性が偏向しないよう、可能な限り様々な属性を選定

データ採取

* : () 内は人数

実施した調査	回収方法	回収率	回答者内訳												
期中ヒアリング	イベント期間中、休憩のタイミングで参加学生を中心にヒアリングを行った	15% (6/39人)	<table border="1"> <tr> <th>障害のある学生 9</th> <th>障害のない学生 16</th> <th>インストラクター/メンター 14</th> </tr> <tr> <td>うち3人</td> <td>うち2人</td> <td>うち1人</td> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(1)* ダウン症(1) 肢体不自由(1) </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(2) </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> SOCIAL WORKERZ(1) </td> </tr> </table>	障害のある学生 9	障害のない学生 16	インストラクター/メンター 14	うち3人	うち2人	うち1人	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(1)* ダウン症(1) 肢体不自由(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(2) 	<ul style="list-style-type: none"> SOCIAL WORKERZ(1) 			
障害のある学生 9	障害のない学生 16	インストラクター/メンター 14													
うち3人	うち2人	うち1人													
<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(1)* ダウン症(1) 肢体不自由(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(2) 	<ul style="list-style-type: none"> SOCIAL WORKERZ(1) 													
期末ヒアリング	イベント終了という節目で、有志を募り、zoomで1on1のヒアリングを行った	21% (8/39人)	<table border="1"> <tr> <th>障害のある学生 9</th> <th>障害のない学生 16</th> <th>インストラクター/メンター 14</th> <th>学生の保護者 14</th> </tr> <tr> <td>うち2人</td> <td>うち2人</td> <td>うち3人</td> <td>うち1人</td> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(1) 肢体不自由(1) </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(2) </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ダンサー(1) SOCIAL WORKERZ(1) 手話通訳士(1) </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 学生の保護者(1) <small>※期末ヒアリングでは母集団として対象外</small> </td> </tr> </table>	障害のある学生 9	障害のない学生 16	インストラクター/メンター 14	学生の保護者 14	うち2人	うち2人	うち3人	うち1人	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(1) 肢体不自由(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンサー(1) SOCIAL WORKERZ(1) 手話通訳士(1) 	<ul style="list-style-type: none"> 学生の保護者(1) <small>※期末ヒアリングでは母集団として対象外</small>
障害のある学生 9	障害のない学生 16	インストラクター/メンター 14	学生の保護者 14												
うち2人	うち2人	うち3人	うち1人												
<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(1) 肢体不自由(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(2) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンサー(1) SOCIAL WORKERZ(1) 手話通訳士(1) 	<ul style="list-style-type: none"> 学生の保護者(1) <small>※期末ヒアリングでは母集団として対象外</small>												
期末アンケート	イベント終了の節目で、参加学生・メンター・保護者を対象にアンケートを配布して回答を募った	77% (41/53人)	<table border="1"> <tr> <th>障害のある学生 9</th> <th>障害のない学生 16</th> <th>インストラクター/メンター 14</th> <th>学生の保護者 14</th> </tr> <tr> <td>うち8人</td> <td>うち13人</td> <td>うち13人</td> <td>うち7人</td> </tr> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(3) ダウン症(4) 肢体不自由(1) </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(13) </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> ダンサー(1) SOCIAL WORKERZ(12) </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> 学生の保護者(7) </td> </tr> </table>	障害のある学生 9	障害のない学生 16	インストラクター/メンター 14	学生の保護者 14	うち8人	うち13人	うち13人	うち7人	<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(3) ダウン症(4) 肢体不自由(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(13) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンサー(1) SOCIAL WORKERZ(12) 	<ul style="list-style-type: none"> 学生の保護者(7)
障害のある学生 9	障害のない学生 16	インストラクター/メンター 14	学生の保護者 14												
うち8人	うち13人	うち13人	うち7人												
<ul style="list-style-type: none"> 聴覚障害(3) ダウン症(4) 肢体不自由(1) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンス部の学生(13) 	<ul style="list-style-type: none"> ダンサー(1) SOCIAL WORKERZ(12) 	<ul style="list-style-type: none"> 学生の保護者(7) 												

合意形成
1 評価目的意義
ロジックモデル
2 評価計画策定
アウトカム測定
スケジュール
3 評価実施
アウトカム
評価プロセス
イベント

3 – 1. アウトカムに対する評価

検証5項目について、非常によいアウトカムを得ることができた。課題を挙げるなら、“一歩踏み込んだアイスブレイク企画”と“イベント未経験層での成果創出の再現”がある

サマリ：それぞれのアウトカム達成度

チェックポイント	テーマ	アウトカム	総評
1	気づき導出の仕掛け	アイスブレイクによるコミュニケーションの活発化	○ アイスブレイクは奏功。障害があってもできるコミュニケーション方法を探り、会話増。一方、障害ごとで打ち解けるまでの差があった（ダウン症の方とは時間がかかった）
2	気づきの導出	互いを知り、理解することの重要性への気づき	◎ 障害の有無に拘わらず、互いに理解し合えることへの気づきがあった。障害がある仲間に対し、慈悲や支援の目線ではなく対等な存在として歩み寄る“喜び”に気づけた
		努力や課題の認知・克服による自信の醸成	◎ ほぼすべての参加者に自信感（特に“障害の有無に関係なく、他人と関係を築けた”という自信）の醸成が認められた
3	気づきの内包・持続	振り返りミーティング実施より気づきの認知・言語化	◎ 振り返りミーティングの実施前でも学びや気づきの実感・仲間との共有は見られたが、実施後の方が、その認知・共有が改善したことが認められた
		仲間づくり、新しい出会いの意義への気づき	◎ ほぼすべての参加者が仲間・友人ができたことを強く実感しており、さらにそれにより、生活が豊かになった/考え方が広がったという効果を感じていることが認められた
		イベント参加・挑戦の意義への気づき	○ ほぼすべての参加者がイベント参加・挑戦への意義を感じる一方で、元々このようなイベントへの参加経験がある人が多く、その点では大きな変化は認められなかった
4	気づきの促進	手話通訳・手話レクチャー、その他工夫によるコミュニケーション活発化	◎ 手話通訳はコミュニケーションにおいて非常に重要な役割を果たしたことが認められた
		D&Iに対する気づきの指導力向上	◎ アイスブレイクやコミュニケーションの前後で、相手の内面・人間性への理解が深まったことが強く認められた。さらにそれを“個性”と捉えられる気づきが多かった
5	前向きな気づきのサポート	日々のコミュニケーションによる子どもの変化への気づき	◎ 今回のイベントをきっかけに、親子の会話量が増えたことが認められた。“（会話量が）変わらない”という回答もあったが、すでに会話のある親子であった
		子どもが持つ不安や課題感への気づき	◎ 子の持つ不安・課題感に対して、親が認識できるようになったことが認められた。その後の子への助言・支援に関しては、親子それぞれの関係・やり方が見られた

“強制会話機会”であるアイスブレイクは、コミュニケーション活発化に寄与。会話方法も、相手に歩み寄る方法が模索された。複数の接触機会ですら丁寧にその状態に行き着いた

1 気づき導出の仕掛け-アイスブレイクによるコミュニケーションの活発化 (1/2)

サマリ

期中ヒアリング

期末ヒアリング

期末アンケート

何回か参加すると、次第にメンバーと目が合うようになり、互いに声掛けができるようになった。
今まで自分から積極的に話せなかったが、**会う機会が増えて**、自然と仲良くなり、話せるようになった
(聴覚障害のある学生)

最初は話したくても話せない雰囲気だったところ、名前飛ばしゲームといったきっかけによって少しメンバーと話せるようになった。ただ、**最初に手話を覚えてもらう機会があればもっとコミュニケーションとれたはず**
(聴覚障害のある学生)

21/21

アイスブレイクでコミュニケーションの活発化を感じた学生

最初は緊張していた。無言になることや、あまり話せないことも多かったが、**徐々に**仲良しの雰囲気になった
(ダウン症の学生)

最初は接し方の感覚がつかめず、皆そわそわしていた。自身も人見知りであるため、コミュニケーションをとらざるを得ない環境を創り出してもらう(アイスブレイク等)ことは重要だった。会う回数やコミュニケーションが増えるにつれ、**互いの表情をよく見てコミュニケーションをとるようになったり、手による合図を大切にようになった**
(高校ダンス部の学生)

21/21

コミュニケーションを通じた相互理解の重要性に気付いた学生

参加する前は、ギスギスした雰囲気なのは、と不安に思うこともあったが、**いざ始まってみると**、みんなが話し合っていることを知り、いい雰囲気だなと思った
(ADHDのインストラクター：ソーシャルワーカーズ)

会う回数やアイスブレイクを重ねることで、**1対1のコミュニケーションスタイル**を築いていった。手話に加え、ジェスチャーの合図やサインを互いに決めリズムをとったり
(高校ダンス部の学生)

14/14

アイスブレイクでコミュニケーションの活発化を感じたメンター・企画者

アイスブレイクを重ね、少しずつ手話などを覚えられるようになり、自然と距離が近くなっていった
(高校ダンス部の学生)

回を重ねる中で1対1のコミュニケーション方法が確立されていったことは大きなアウトカム。
“いつもの会話方法”から脱皮し相手に合わせた方法を試みる“歩み寄り”が見られた

定量的にもアイスブレイクの効果は非常に大きかったことが認められた

参加学生はアイスブレイクを高評価。回答者21名全員がコミュニケーションの活発化を実感。 “自己紹介・雑談”は普遍的な方法だが、手話学習（=共通言語作り）も成果が見られた

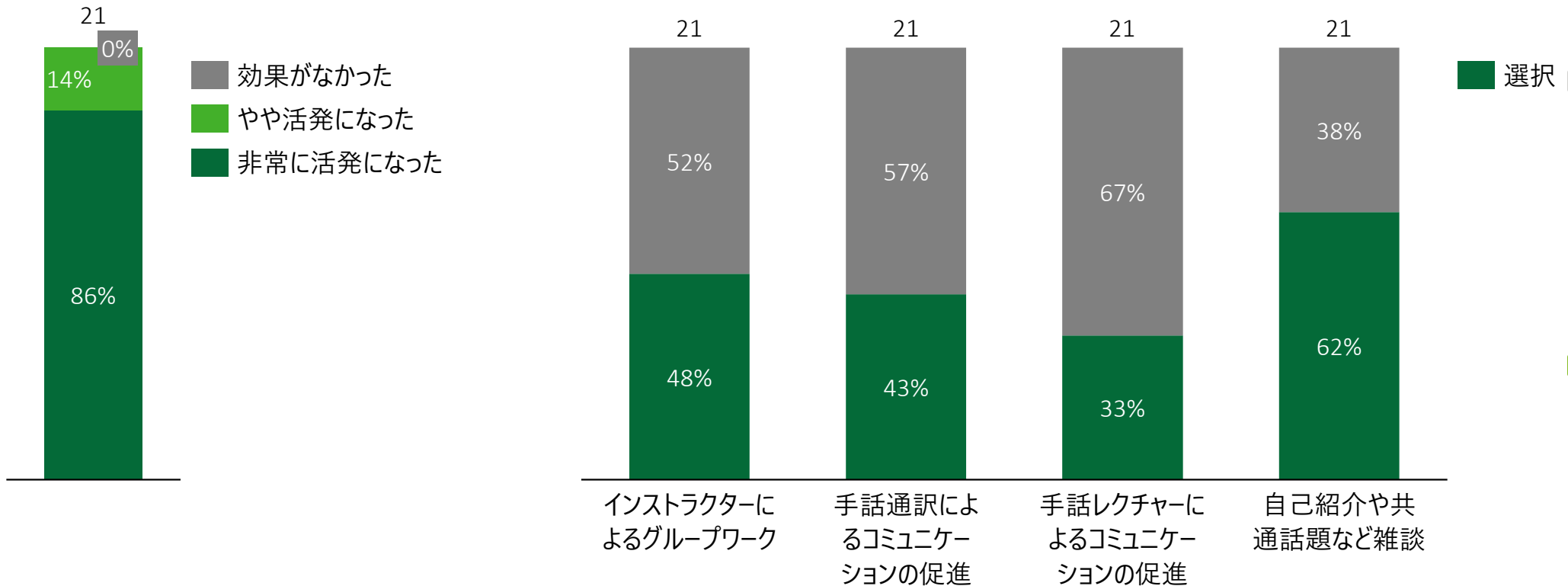
1 気づき導出の仕掛け-アイスブレイクによるコミュニケーションの活発化（2/2）

参加者の目線

学生への期末アンケート（障害あり/なし含む：n=21）

アイスブレイクを実施することで、メンバー同士のコミュニケーションは活発になったと感じますか？

どのようなアイスブレイクでコミュニケーションが活発になりましたか？（複数選択）



参加者は、障害の有無を問わず、相互理解への重要性に気付くことができた。さらに他者を鏡として、自分自身の“心・感情”や“らしさ”に気付く人もおり、非常によい結果となった

2 気づきの導出-互いを知り、理解することの重要性への気づき (1/3)

サマリ

期中ヒアリング

ダンスを通じて、いろんな方法で自己表現ができる・しているんだと気づいた。
手話を少しずつ覚えた。手話に関する関心が高まった
(高校生ダンス部の学生)

皆が積極的にかかわり合おうとしてくれることで、自分自身も他者へ関わろうと勇気づけられた
(高校生ダンス部の学生)

障害のある人と“意外と”話せることを知った
(ADHDのインストラクター：ソーシャルワーカーズ)

これまでパラダンススポーツではひとりでダンスをしていたので、また障害のある人といっても車いすの方と話す程度だったので、「みんなでダンスする」というイメージがなかったが、色んな人に出会えて楽しいと強く思う。友達をたくさん作りたいと思う自分に気づいた。
自分らしさとは「笑顔」と「感情表現」と再認識
(車椅子の学生)

自分と状況の異なる他者への気づき・理解が見られた。さらに他者を鏡に、自分自身の心やらしさへの気づきも見られた

期末ヒアリング

メンバーとのコミュニケーションを通じて、手話は「会話を助けてあげるための道具」ではなく、手話を一つの「共通言語」「言語」として捉えるようになった。

また、「助けてあげる」というある種上から目線の視座に対して違和感を持つようになった。

手話や障害がある方との交流や身近でなかったが、日常に「言語」として入ってきた（もともと日本語、英語、その他の言語を学ぶことが好き）

(高校生ダンス部の学生)

手話を単なる道具ではなく、言語だと捉えるなど、他者への尊重に根差した気づきが見られた

期末アンケート

21/21

イベントを通じ、相互理解の重要性を感じている学生

20/21

イベントで、他メンバーの人間性や内面への理解ができたと思う学生

定量的にも相互理解への重要性の気づきが実現できたことが認められた

参加学生はイベント前後で、他メンバーへの理解が深まったと回答。外見的/外面的な気づきから更に一歩進み、内面や人間性を理解する重要性を自覚したと推察できる

2 気づきの導出-互いを知り、理解することの重要性への気づき (2/3)

参加者の目線

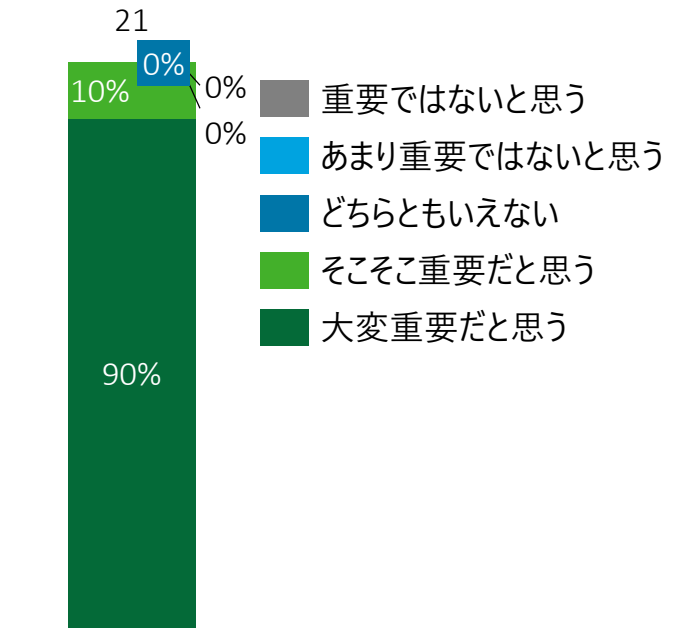
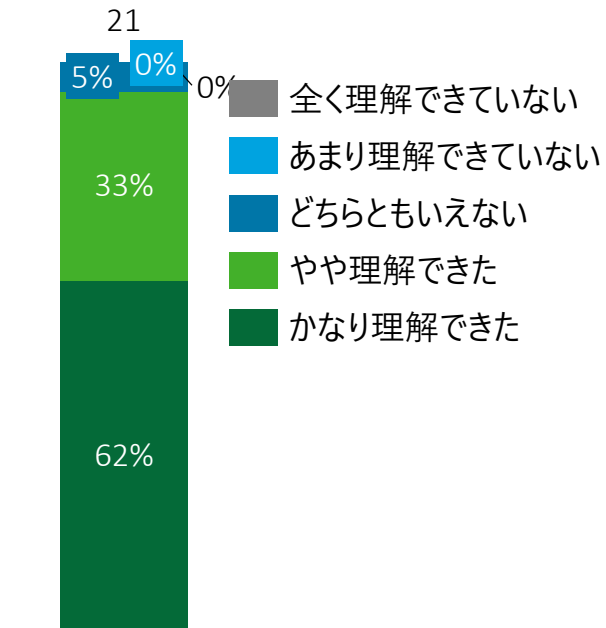
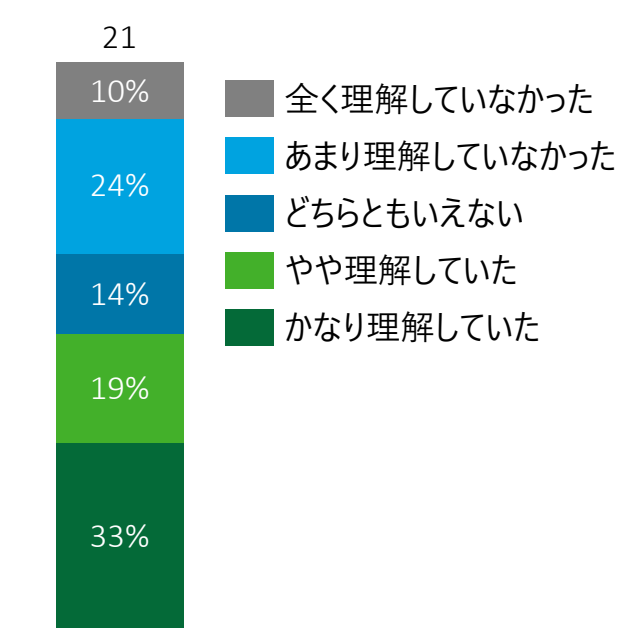
学生への期末アンケート (障害あり/なし含む：n=21)

イベント前後での、他メンバーの人間性や内面への理解度変化

イベント前、他メンバーの人間性や内面について、どの程度理解していたと思いますか？

イベント後、他メンバーの人間性や内面について、どの程度理解できたと思いますか？

イベントを通じて、互いを知り、理解することは重要だと思えるようになりましたか？



学生の気づきは、シンプルにその人の“個性”への気づきが最大だった。 また、障害に起因する気づきだけでなく、“明るさ”など内面への気づきもあった

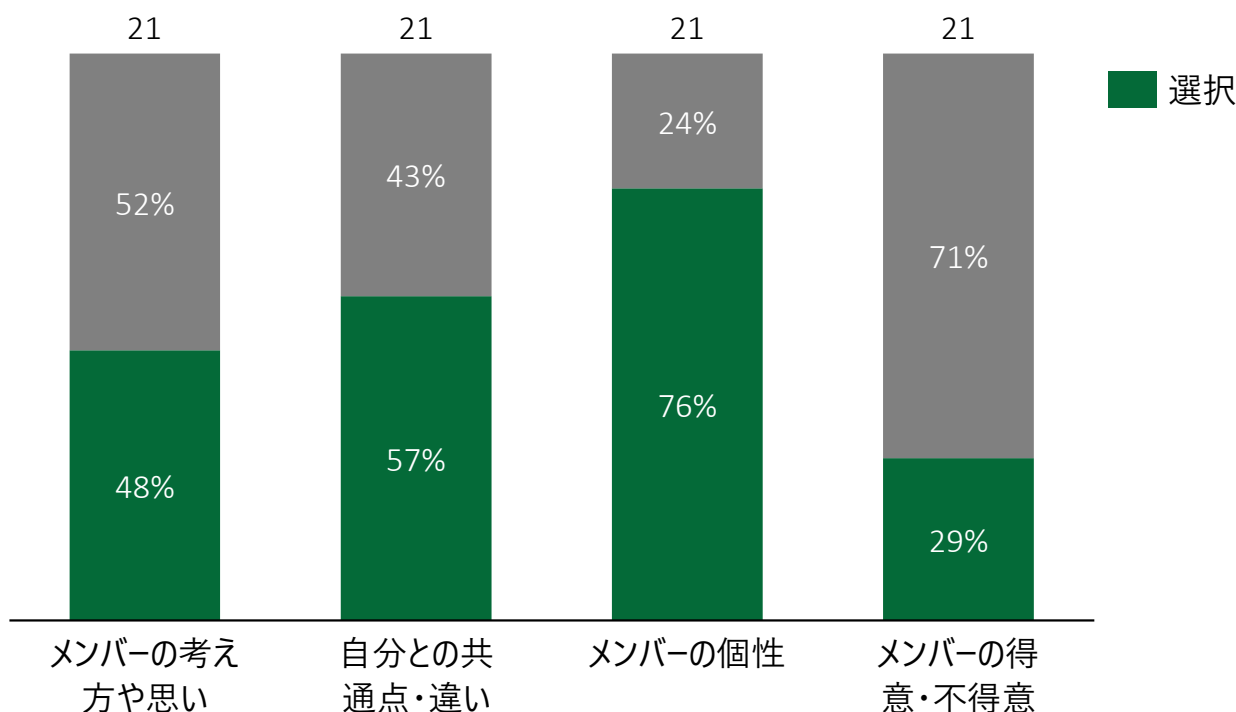
2 気づきの導出-互いを知り、理解することの重要性への気づき (3/3)

参加者の目線

学生への期末アンケート（障害あり/なし含む：n=21）

コミュニケーションを通じ、メンバーについてどのようなことに気づきましたか？

気づきを具体的に教えてください



障害有無関係なく、誰でも仲良くなれる
(学生：障害なし)

最初はちょっと困ったけど、だんだん話すようになって、仲良くなって、みんな優しくてうれしかった。仲間だと思った
(学生：障害なし)

自然とサポートしてくれる人はまわりをみてる
(学生：障害あり)

私が障害者の不得意なことだと思っていたことが実は違って、もっと違うことが不得意だったと気がついた
(学生：障害なし)

当たり前だけど、自分とは考え方も全て違うことと、それを認める大切さ
(学生：障害なし)

明るい子だな
(学生：障害なし)

イベントを通じた自信獲得についても、非常によいアウトカムを得られた

2 気づきの導出-努力や課題の認知・克服による自信の醸成 (1/3)

サマリ

期中ヒアリング

足のリズムがわからなかったが、友人から教えてもらい、わかるようになった
難しいことに挑戦することで自信を感じている
(聴覚障害の学生)

期末ヒアリング

車椅子ということで、メンバーと同じ表現方法ができないからこそ、自分なりの個性ある表現方法とは何かを探求していた。
一方で、個性を出しすぎること、ハーモニーを崩してはいけなかったと考えていたが、逆にそれぞれが個性を爆発させることで良いものが創られるのだという考え方に変わった
(車椅子の学生)

障害がある方を「助けてあげる」というある種上から目線の見方に対して違和感を感じるようになった。
実際に様々な形でコミュニケーションをとることで、「違う」ではなく「同じ」と感じるようになったため。
この感覚は今後も大切にしたい
(高校ダンス部の学生)

期末アンケート

20/21

イベントを通じ、自信を持てるようになった学生

困難への挑戦自体が自信につながった

“違う=個性” や “同じ=理解” など、どちらにしろ肯定的な気づき・自信獲得が見られた

定量的にもイベントを通じた自信獲得が実現できたことが認められた

イベント前は自分に自信を持っている割合は41%だったが、イベント後は95%までに成長した

2 気づきの導出-努力や課題の認知・克服による自信の醸成 (2/3)

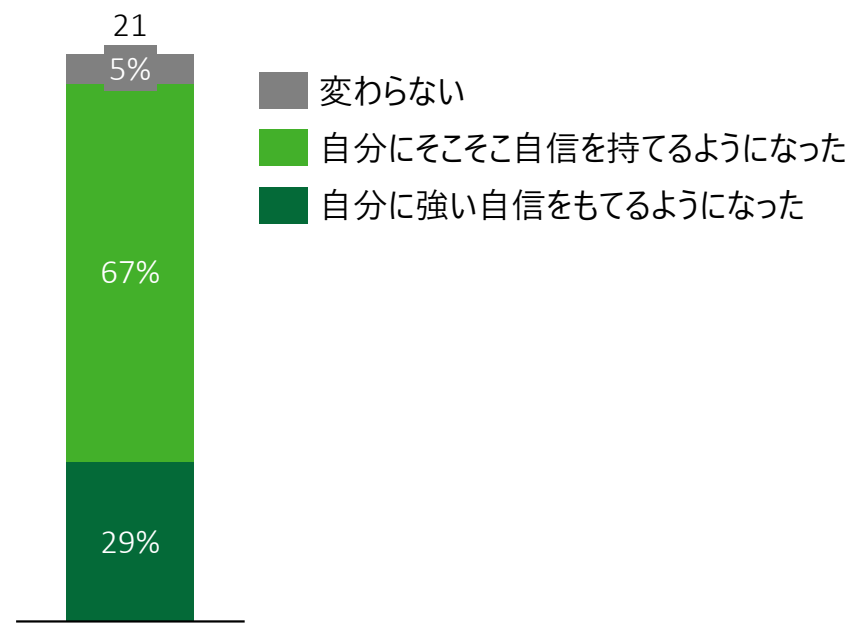
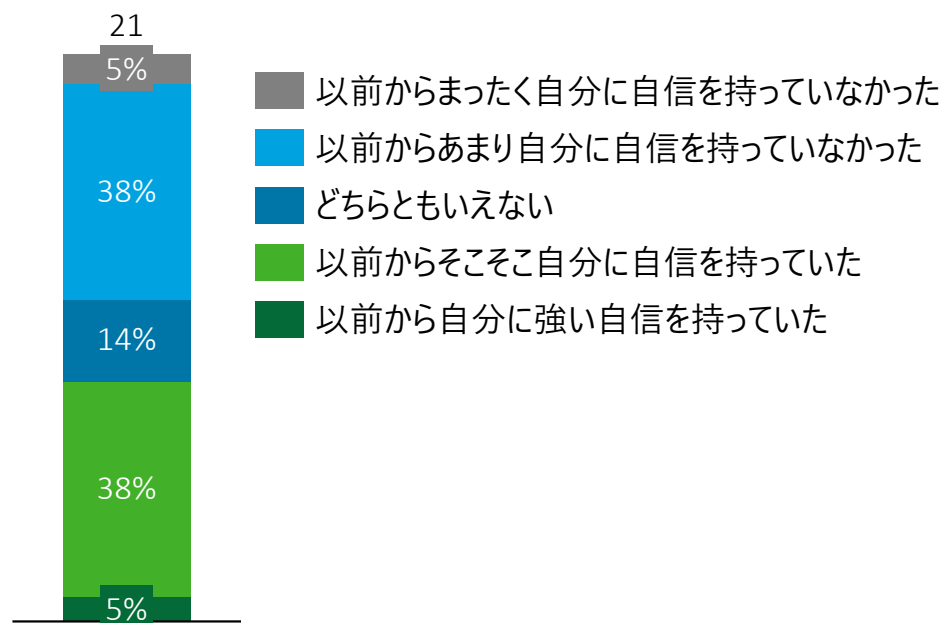
参加者の目線

学生への期末アンケート (障害あり/なし含む：n=21)

イベント前後での、自信の変化

イベント前、ダンス・コミュニケーション全般で、自分に自信がありましたか？

イベント後、自分に自信を持てるようになりましたか？



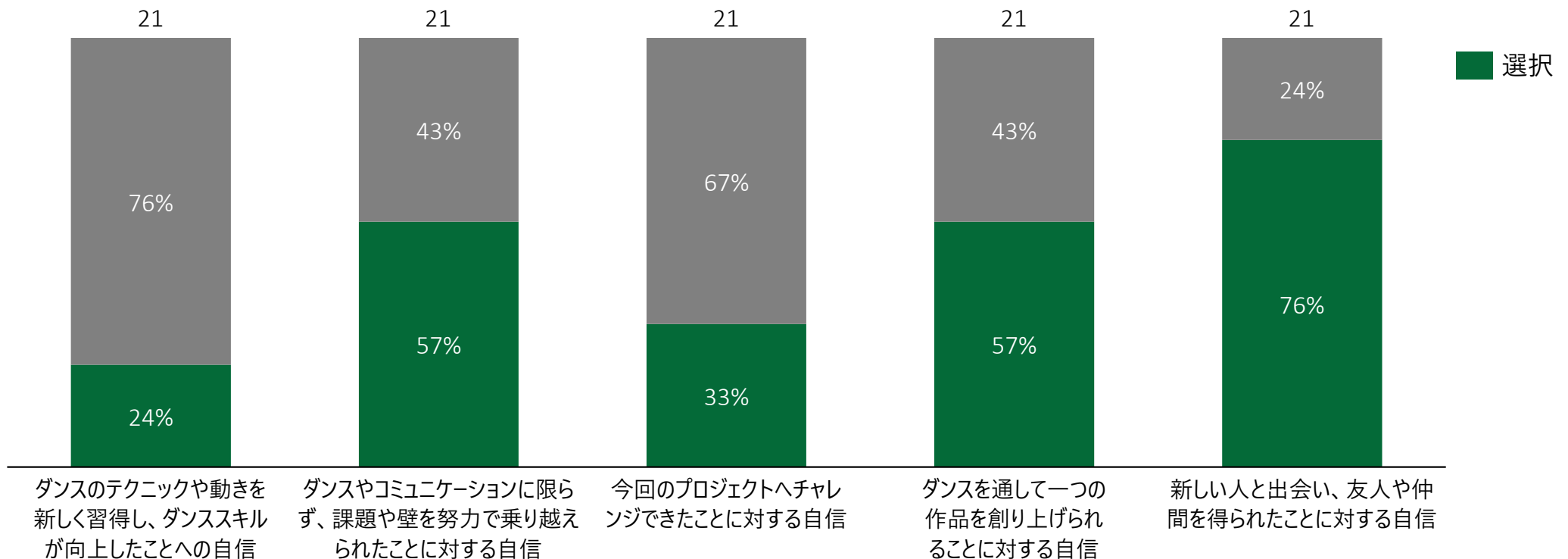
獲得した自信の内容は、ダンスのテクニックや動きそのものよりも、“新しい人と出会い、友人や仲間を得られたことに対する自信” というD&I関連の選択肢が最大だった

2 気づきの導出-努力や課題の認知・克服による自信の醸成 (3/3)

参加者の目線

学生への期末アンケート（障害あり/なし含む：n=21）

今回のダンスプロジェクトを通じて、どのようなことに自信を持てるようになりましたか？



振り返りミーティングは、学生の気づきの定着に寄与したように思われる。その中でも、参加者同士だけでなく、家族との振り返りも重要であり、家族を巻き込む意義も確認された

3 気づきの内包・持続- 振り返りミーティング実施より気づきの認知・言語化 (1/4)

サマリ

期中ヒアリング

「こうした方が伝わる」ということをメンバーに話すようになった。最初からではなく、徐々に自然と振り返りが多くなってきたと思う
(高校ダンス部の学生)

家族にダンスのことを聞かれるので、家族と話す。家で、ダンスのことを話したり、ダンスの練習をしったりしている
(ダウン症の学生)

ダンスプロジェクトに参加していないが、学校の友人によかったこと、楽しかったことを積極的に話している
(ADHDのインストラクター：ソーシャルワーカーズ)

振り返りの効果を実感し、自然と振り返ることが増えたことが見られた。また、振り返る相手は同じ参加者に限らず、家族も重要な存在であることがわかった

期末ヒアリング

今回、ステージに関して心に引かれたことがあった。

手話パフォーマーは歌を手話で伝えるだけだと思ったが、手話パフォーマーが最後にダウン症の人が踊っていたところに重なってダウン症の方が見えなくなってしまったので、(手話パフォーマンスを伝えることも重要だが、今回の主役はダンサーなので)もったいないと思った。

一緒に踊りたいときは、事前に手話パフォーマーがダンスに入ることを確認した方がよいと思った

(聴覚障害の学生)

パフォーマンスに関する改善点の発言。企画意図を汲み取った振り返りができている証拠である

期末アンケート

19/21

振り返りミーティング前に気づきを共有していた学生

20/21

振り返りミーティングによって気づきを共有できた学生

振り返りミーティング前も、気づきや学びの共有があったようだが、振り返りミーティングによってその効果は高まった (次頁詳述)

振り返り前でも90%が気づきを認識していたが、言語化・共有できていたのは76%に止まる。 振り返りミーティングによって気づきを言語化・共有までできた割合は95%まで成長した

3 気づきの内包・持続- 振り返りミーティング実施より気づきの認知・言語化 (2/4)

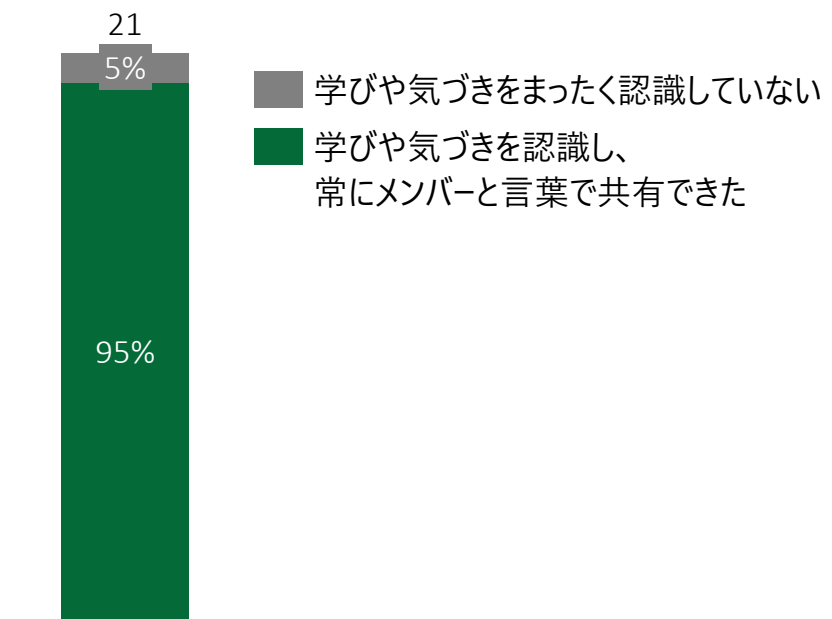
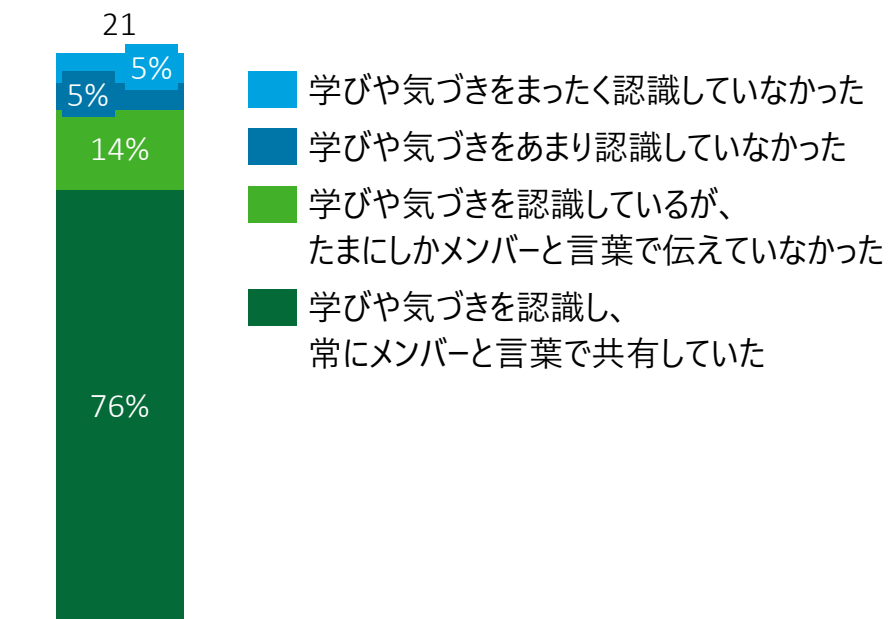
参加者の目線

学生への期末アンケート (障害あり/なし含む：n=21)

振り返りミーティング前後での変化

振り返りミーティング前に、どの程度、気づき・学びを認識し、メンバーと言葉で共有していましたか？

振り返りミーティングを実施することで、どの程度、気づき・学びを認識し、メンバーと言葉で共有できましたか？



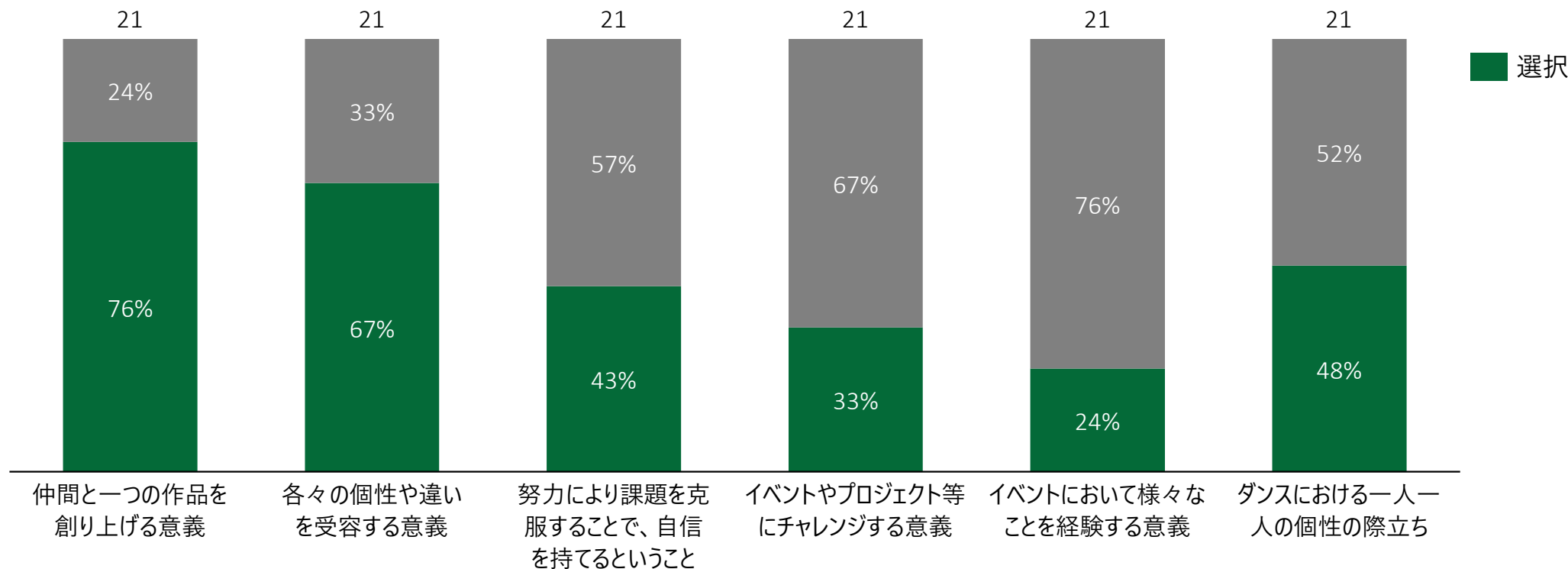
振り返りミーティングで認識できた気づき・学びの内容は、“仲間”や“各々の個性”など、D&Iに関するものが大きく、設計したアウトカムを得られたと言える

3 気づきの内包・持続- 振り返りミーティング実施より気づきの認知・言語化 (3/4)

参加者の目線

学生への期末アンケート (障害あり/なし含む：n=21)

振り返りミーティングにおいて、どのような気づきや学びを認識しましたか？



振り返りミーティングの意義は、“自分の気づきを言語化し、認識を強めること”に限らず、“他者の気づきから、新しい気づきを得ること”という点にもあることが確認された

3 気づきの内包・持続- 振り返りミーティング実施より気づきの認知・言語化 (4/4)

参加者の目線

学生への期末アンケート (障害あり/なし含む：n=21)

振り返りミーティングで気付いたことについて、具体的に教えてください

細かい反省点や良かった点にすぐ気づくことができた
(学生：障害なし)

手話通訳がいたから振り返りもスムーズに自分の伝えたいことが伝えられたと思う
(学生：障害あり)

みんな見ていてくれるんだなと思った
(学生：障害なし)

一人一人の体の違いによって難しいところが違うこと
(学生：障害なし)

みんなも不安があることがわかったし、一緒に頑張る気持ちが膨らんだ
(学生：障害あり)

自分の振り返りだけでなくメンバーの意見を聞くことで一人一人違った視点から物事を考えていることに気づいた。振り返りミーティングをすることによって個人だけの振り返りではなく全体としてどうだったかを考えることが出来た。他のメンバーの次頑張りたいことを聞くことで自分も頑張ろうとより思っていたことに気づいた
(学生：障害なし)

それぞれ人によってその日に嬉しかったことや悔しかったことが違って、色々な視点から練習の質を高める方法を考えることが出来ました
(学生：障害なし)

自分にはない気づきをされた時
(学生：障害なし)

イベントを通じて友人や仲間を得たと感じる学生がほとんどであり、さらにそのことに意義を感じていることが確認された

3 気づきの内包・持続- 仲間作り、新しい出会いの意義への気づき (1/3)

サマリ

期中ヒアリング

最初は不安だったが、何回か参加すると、次第にメンバーと目が合うようになり、声掛けできるようになった。例えば、ダンスで足を動かす練習をするときに、わからないと思った時、メンバーと目が合って、すぐに教えてくれるような関係になった
(聴覚障害の学生)

障害をもつ人とこれまで関わってこなかったため、接し方に戸惑っていた。障害のある人にどう話しかけたらよいか、打ち明け方がわからなかった。しかし友人と一緒に、障害のある人とかかわるようになって自然と距離が縮まった
(高校ダンス部の学生)

最初は緊張してうまく話せなかった。
回数を重ねて会うこと、ダンスによって仲良くなった
(ダウン症の学生)

やはり最初は不安や緊張があったが、同じ目標の下、時間を共にすることで、関係性を深めていったことがわかる

期末ヒアリング

本番もそうだが、練習で友達とコミュニケーションがとれたことがとても楽しかった。
くだらない雑談（衣装のこと学校のこと、ダンスのこと）を高校生や車いすの方、いろいろな人とたくさん話し、関わるのが楽しかった
(聴覚障害の学生)

“楽しかった”というシンプルかつ究極の喜びを感じることができていた

期末アンケート

10/21

イベント前に、新しい人との出会いが“それなり”以上にあった学生

20/21

イベントを通じて、友人や仲間ができたと感じる学生

イベントを通じて、友人や仲間ができたことが確認できた

今回のイベントは、学生が新しい友人・仲間を見つけるという点で、非常に有意義であったことが確認された

3 気づきの内包・持続- 仲間作り、新しい出会いの意義への気づき (2/3)

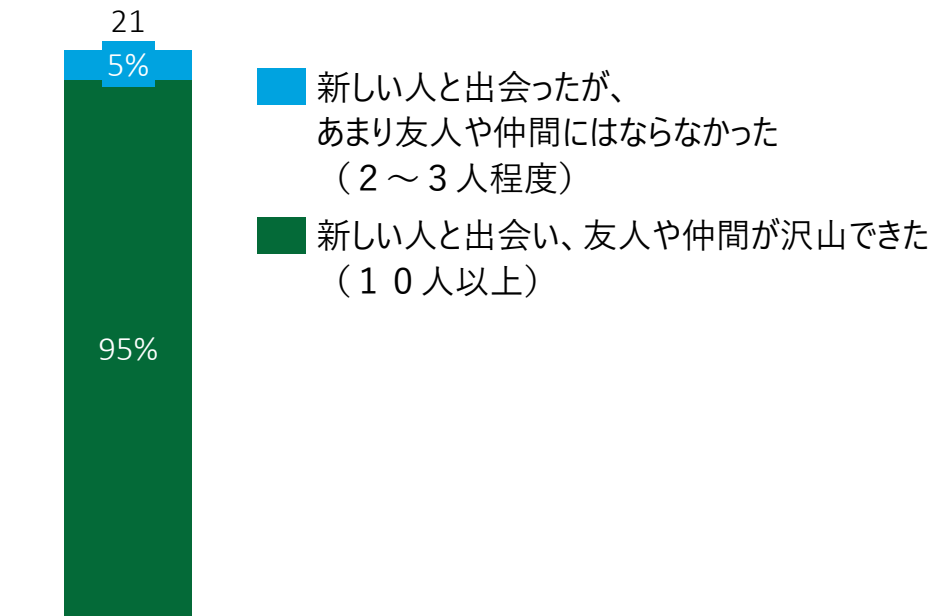
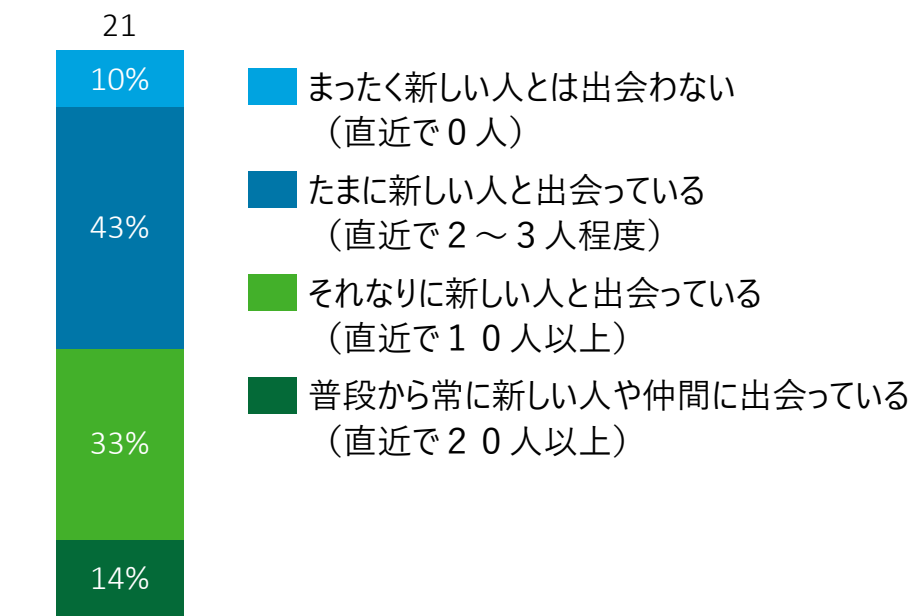
参加者の目線

学生への期末アンケート (障害あり/なし含む：n=21)

イベント前後での変化

今回のダンスプロジェクトに参加する前について、どの程度、新しい人との出会いがありましたか？

今回のダンスプロジェクトを通じて、新しい出会いや仲間作りができましたか？



新しい出会い・仲間作りの意義として、シンプルで究極的な“楽しい”というものの他にも、“考え方や知識が広がる”という“学び”寄りの意義も見られた

3 気づきの内包・持続- 仲間作り、新しい出会いの意義への気づき (3/3)

参加者の目線

学生への期末アンケート（障害あり/なし含む：n=21）

新しい人や仲間に出会うことで、考えが変わったことや気付いたことはありますか？



- 新しい出会いや仲間づくりを通じて、それ自体を楽しみ、新しい人と交流することをためらわなくなった
- 新しい出会いや仲間づくりを通じて、これまでの生活がもっと楽しいと思えるようになった
- 新しい出会いや仲間づくりを通じて、新しい考え方や知識を広げることができると気づいた

今回のイベントを通じて、イベント参加に限らず、手話やダンスなどの個々人のテーマで更なる挑戦をする意欲が強まっていることが確認できた

3 気づきの内包・持続- イベント参加・挑戦の意義への気づき (1/3)

サマリ

期中ヒアリング

難しいことに挑戦することで自信を感じている。
もっと挑戦をしていきたい
(聴覚障害の学生)

将来また障害のある人とダンスをするかもしれないと思うし、**もっと関わりたい・知りたい**と思っている
(高校ダンス部の学生)

自分のレベルを認識し、もっと頑張ろうと思う。**自分らしさ「笑顔」と「感情表現」をモットーに今後も励みたい**
(車椅子の学生)

ダンスを続けていきたい。**またこのメンバーとダンスをしたい**と思った
(ダウン症の学生)

障害のある方にダンスを教えることが難しいと思った。未だにうまく教えられなかったと罪悪感を感じることもある
(ADHDのインストラクター：ソーシャルワーカーズ)

今回のイベントが更なる挑戦意思に繋がり、また**“障害の人と共に” や “このメンバー” という共同体意識への醸成**にも繋がった

期末ヒアリング

手話を「道具」ではなく、「言語」として捉えられたため、手話を自分で調べて使うようになった。もともと言語を学ぶことが好きなので、**手話を勉強する決断をした**
(高校ダンス部の学生)

確かに日常とは異なる気遣いや思いやりが必要だったが、**何よりもダンスが好きという一つの共通点をもとに楽しむことが重要だと痛感した**
(高校ダンス部の学生)

世界のいろいろな方とダンスしたいと思った。ダウン症や、車椅子の方がいて、ダンスに限界がないことを知った
(聴覚障害の学生)

イベント参加に限らず、**手話やダンスなどのテーマで更なる挑戦を続けていく意思**が確認できた

期末アンケート

17/21

今回のイベント前に、別のイベント参加があった学生

21/21

今回のイベントを通じて、他のイベントに参加意思を持った学生

今回のイベントが参加学生にポジティブな経験となり、他イベント・企画への参加意思を強めるきっかけとなった

今回の参加者は、95%が過去何らかのイベントに参加したことのある“経験者”であった。 今後は“未経験者”の巻き込みや、彼らへの気づき作りなどが“挑戦”になるか

3 気づきの内包・持続- イベント参加・挑戦の意義への気づき (2/3)

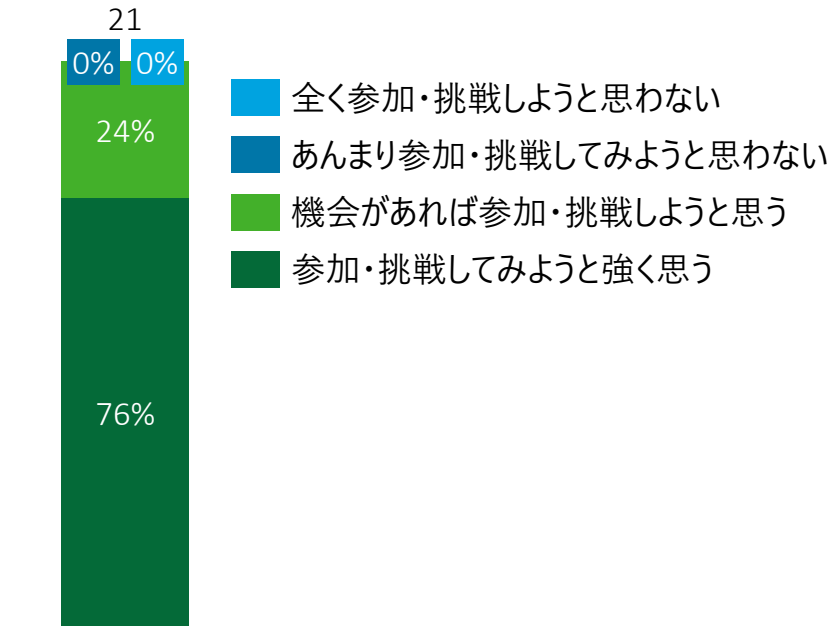
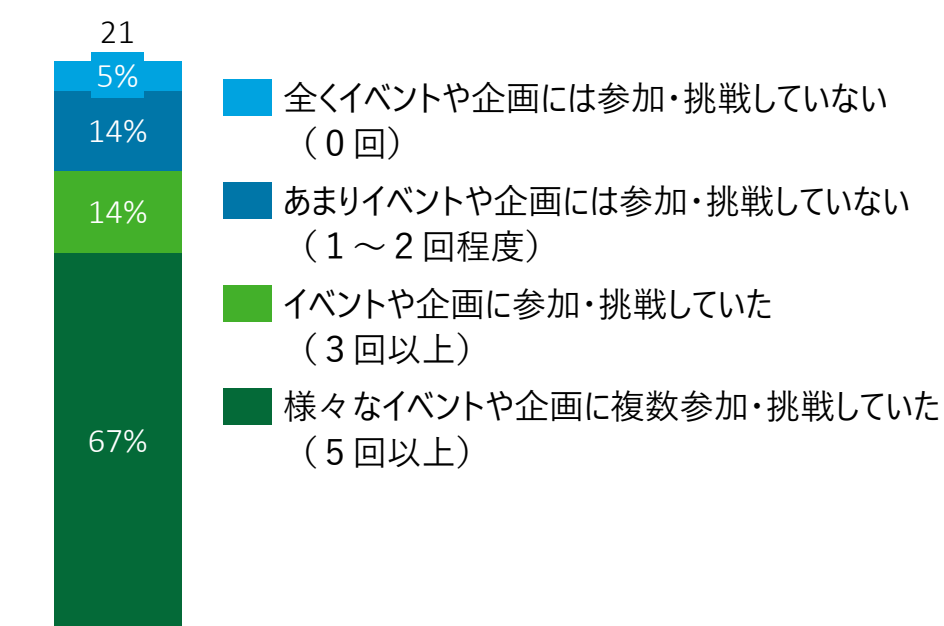
参加者の目線

学生への期末アンケート (障害あり/なし含む：n=21)

イベント前後での変化

今回のダンスプロジェクトに参加する前は、どの程度、他のイベントや企画等に参加・挑戦していましたか？

今回のダンスプロジェクトを通じて、他のイベントや企画に参加・挑戦してみようと思うようになりましたか？



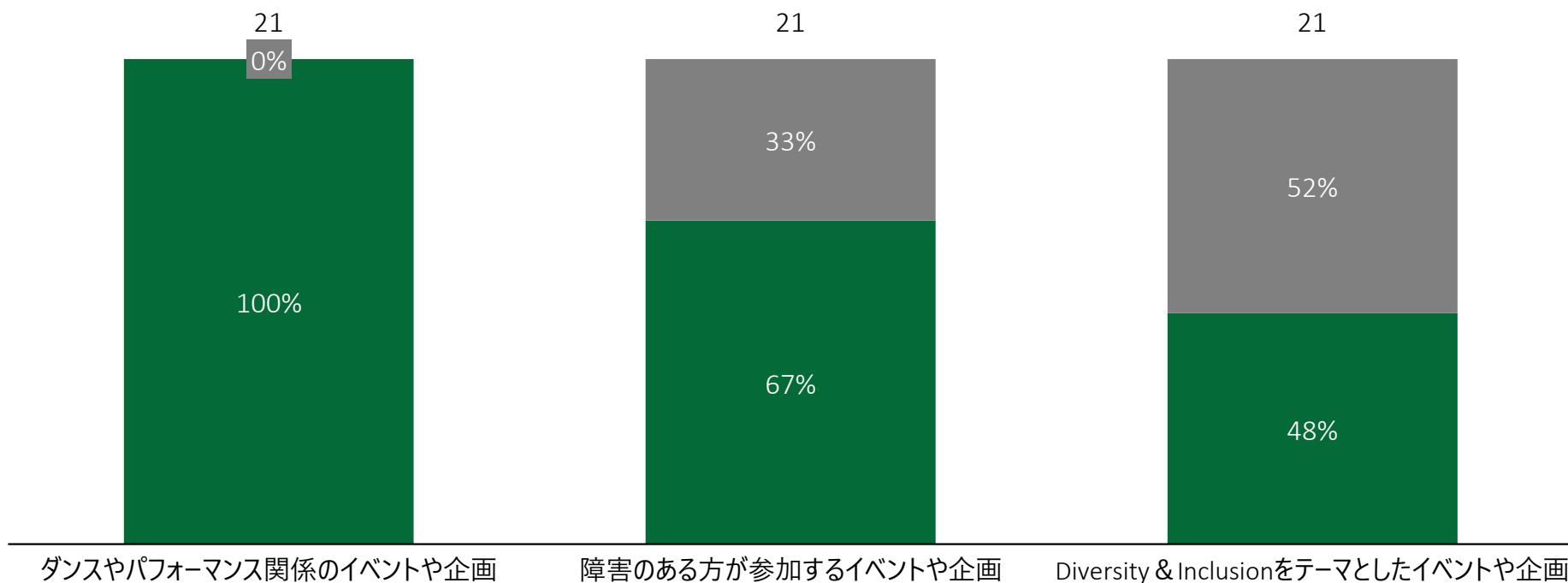
定量調査では“イベント・企画”ベースの次なる挑戦意思を確認し、よい結果を得た。一方、定性調査（前々頁）では、イベント・企画に限定しない挑戦意思も確認できている

3 気づきの内包・持続- イベント参加・挑戦の意義への気づき（3/3）

参加者の目線

学生への期末アンケート（障害あり/なし含む：n=21）

どのようなイベントや企画に参加してみようと思いますか？



- 合意形成
- 1 評価目的の意義
- 2 評価計画策定
- 3 評価実施

今回の目的が“D&Iに関する気づき”であっても、それを強制せず、まさに参加学生が自然に“気づく”空間や雰囲気作りが重要と考え、様々な工夫を試み、効果実感を得られた

4 気づきの促進- 手話通訳・レクチャーなどによるコミュニケーション活発化 (1/7)

サマリ

期中ヒアリング

障害のある方とない方の間で接し方やコミュニケーション時の工夫が分からず不安や心配との声があったが、特に障害のない高校生による障害のある方への接し方の学び、それに伴う交流の活発化が見られた

(ADHDのインストラクター：ソーシャルワーカーズ)

期末ヒアリング

最初の方は、学生同士はお互いに少し距離感を感じていたようだったが、アイスブレイク、手話通訳、雑談、回数を重ねて会うことで、お互いが積極的なコミュニケーションをとるようになった
(インストラクター)

互いがぶつかり合い、切磋琢磨して得られるものを大切にしていれば、無理に互いが関わり合わなくてもよいと考えていた。だからこそ気づきやD&Iの啓発や啓蒙活動を行わず、自然発生する空間を創り上げるようにしていた。気づかせるより、きっかけづくりや種まきになればよい
(インストラクター)

普通の通訳ではなくダンスのことを理解をしたうえでの通訳ということで、若い通訳の方を入れ、雰囲気や空間を大事にできたこともよかった
(手話通訳士)

“障害のない高校生”が学ぶことでの交流活発化という、若干一方通行な歩み寄りも確認された（それ自体はまったく悪ではない）

“理解の強制”ではなく、気づきが自然発生する空間や雰囲気を作るよう、インストラクターは心がけていたことがわかる

期末アンケート

14/14

手話通訳・レクチャーなどでメンバー間のコミュニケーションにポジティブな効果があったと考えるメンター/インストラクター

今回の相互理解・コミュニケーション活発化の工夫はポジティブな結果をもたらしたとわかる

今回、気づきの促進のための工夫は、コミュニケーションの活発化に寄与したとの実感あり。 その中でも、運営側の“ファシリテーション”の効果実感が最大となった

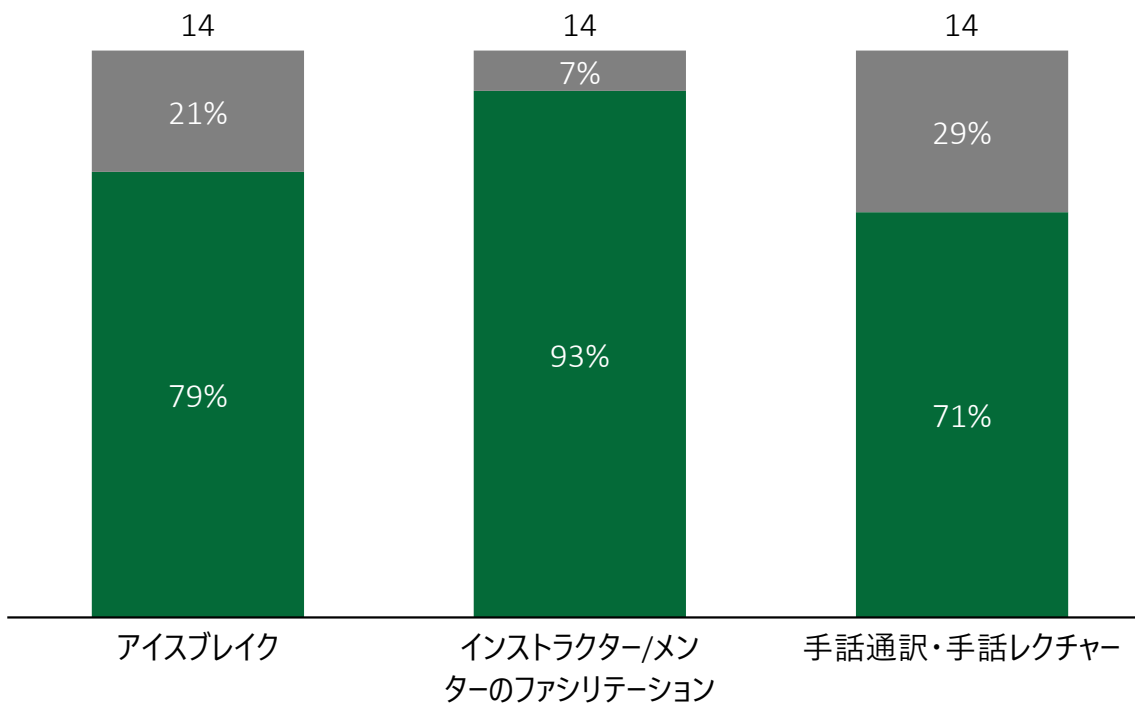
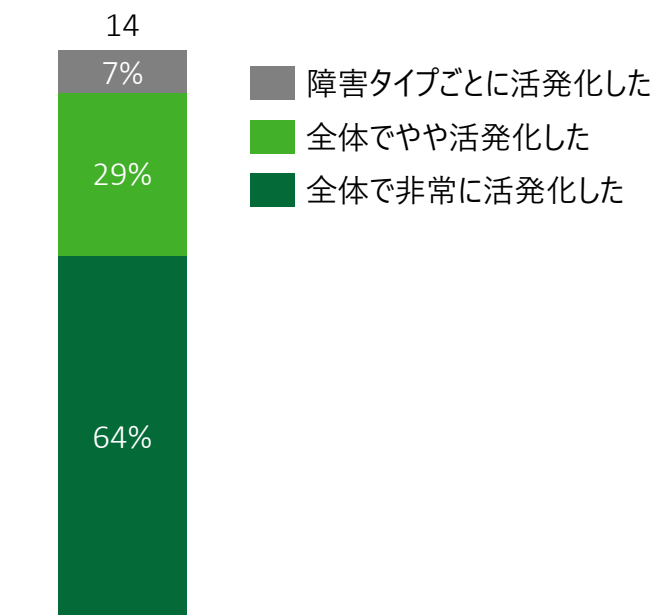
4 気づきの促進- 手話通訳・レクチャーなどによるコミュニケーション活発化 (2/7)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

アイスブレイク・ダンスレッスンにおいて手話通訳
/レクチャーなどを行うことで、メンバー同士の
コミュニケーションはどのように変化しましたか？

どのような工夫により、メンバー同士のコミュニケーションが活発になったと思いますか？



合意形成
1 評価目的の意義
ロジックモデル
2 評価計画策定
アウトカム測定
スケジュール
3 評価実施
アウトカム
評価プロセス
イベント

手話通訳・レクチャー等の工夫はコミュニケーション活発化を促した。しかし、学生任せによる司会進行で発言量が偏ってしまった、障害毎の交流方法のケア不足だったといった問題も

4 気づきの促進- 手話通訳・レクチャーなどによるコミュニケーション活発化 (3/7)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

うまくいかなかったエピソードを教えてください (回答抜粋)

まだ仲がそこまで打ち解けていない段階にも関わらず、振り返りの進行を学生たちに渡して、ディスカッション形式にしてしまった。普段から積極的なメンバーは進んで話してくれるが、他のメンバーはその子に任せて自分から発信できないという空気に。**ファシリテーション無しでのディスカッションはまだタイミングが早かった**と反省した

障害の特徴で各担当者が決まっていたので、コミュニケーションに偏りが出てしまうことがあったので、全体的にもっとコミュニケーションを取れるように出来たら良かったと反省した

デフダンサーに対するコミュニケーションについてはかなり時間をかけて議論していたが、**当初はダウン症のメンバーに対する配慮が欠けていたので、わかりにくかったりついていけなかったりという様子が見受けられ、保護者の方にもご心配をおかけしてしまいました。**

ダウン症へのそれぞれの特性の理解や違いの点

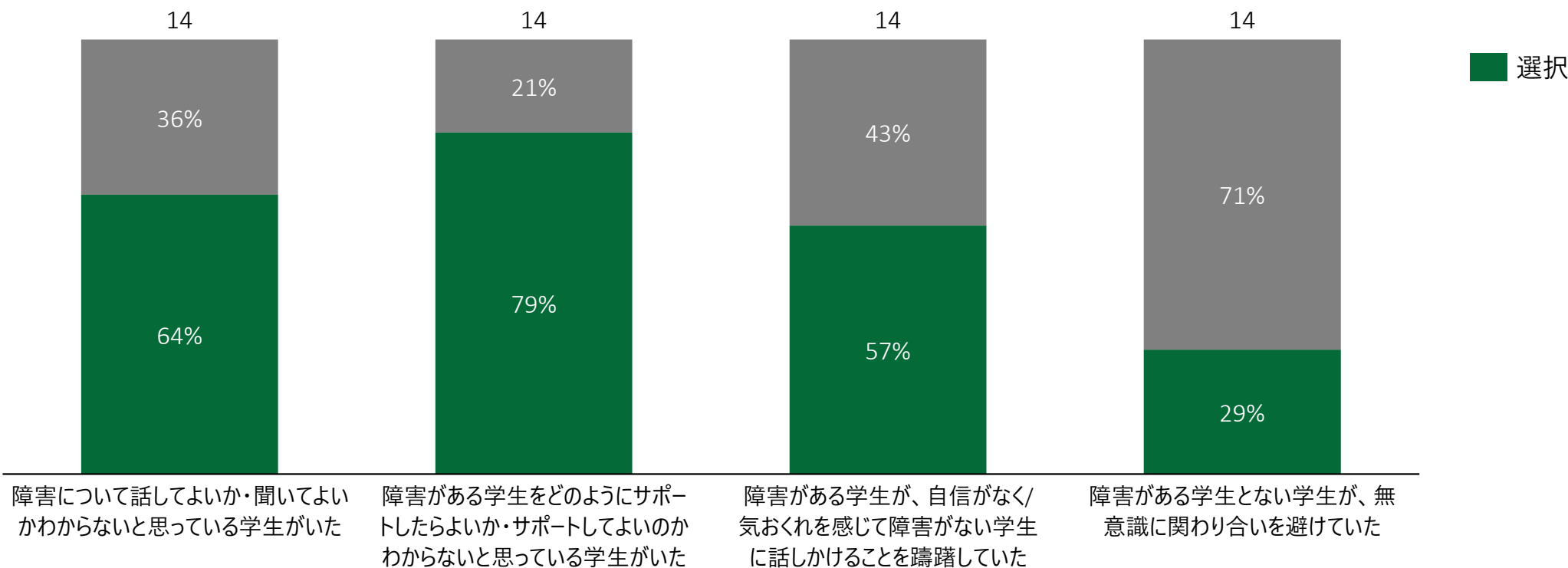
様々な工夫を行う前は、障害のある/ない学生間で、活発なコミュニケーションを行ううえでの課題が感じられていた。仲良くしたいが“どうすればいいかわからない” というものが主

4 気づきの促進- 手話通訳・レクチャーなどによるコミュニケーション活発化 (4/7)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

障害の有無に関係なく、メンバー同士が意見を言い合い、学び合うような関係性を構築するうえで、どのような課題があったと思いますか？



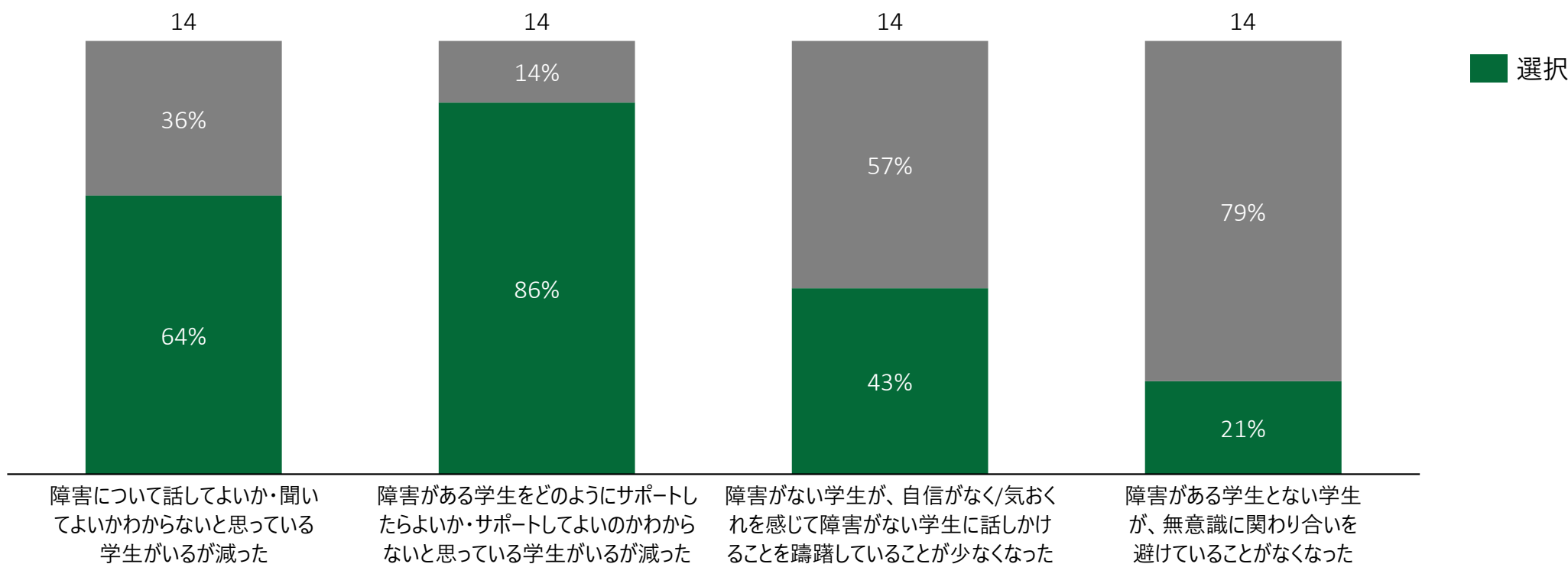
前頁の課題感の選択率と、ほぼ同率で改善実感があり、課題解決が行われたと推察。 “仲良くなりたい”という気持ちはあるため、その方法を示唆するのが効果的だった

4 気づきの促進- 手話通訳・レクチャーなどによるコミュニケーション活発化 (5/7)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

アイスブレイクやダンスレッスンにおいて、手話通訳・手話レクチャー、その他工夫を行うことで、メンバー同士の課題は改善されましたか？



アイスブレイクの効果は確かにあったものの、定性コメントを精読すると、やはり障害のない人で固まることや、きっかけがないとコミュニケーションが取れないことが散見されていた

4 気づきの促進- 手話通訳・レクチャーなどによるコミュニケーション活発化 (6/7)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

アイスブレイクなど工夫した後のメンバーの雰囲気について具体的に教えてください

回を重ねるごとにお互いの個性なども理解しつつ、メンバー同士で話しかけ合う姿なども多く見られた

よくなっていったと思います。名前飛ばしは最後にはみんな、手話でできたらもっとよかった

自分の伝えたい言葉の手話を自ら聞きに行く様子や、足の振り付けを手振りに変更するためにどうするか一緒に考えたり、タイミングを合わせるため隙間時間に繰り返し練習する姿が見られるようになる、など多数ありました

笑顔が増えましたね。ダンサーなので、踊ればコミュニケーションも活発になるのだと感じました

名前を覚えて声をかけあったり、覚えた手話や指文字を使うなどどうやったら相手に伝わるか、相手の話がわかるか考えている様子が見られた

自然とグループに分かれず混ざり合って会話をするようになっていた

友達として仲良くなってる雰囲気が伝わりました

学校や学年も違うため最初は学生同士も交流が少なかった。ただ、アイスブレイクを通すことにより学生同士で交流が行われるようになった。休憩時間に他学校の学生同士で交流したりと変化あり。ただ、その中に障害のある当事者が居ないことは多かった

部活ごとや障害ごとに分かれる事なくどの子がどの学校でどの子が障害があるのかわからないくらい混ざり合って喋ることができていた。自然と笑顔が増え作品以外の話でも会話ができるようになっていた

最初だけ緊張感はありましたが、最終的には関係なく皆が友達になっていました

それぞれに対して興味を抱くようになった気がしました

リハーサルの回数を重ねるごとにフィードバックをいただけただけで全てではないかもしれませんが、改善に向かえたと思います

あそこにいる皆が"知る"ことを会話の中でできていた

ラグジャンスチームなど自らコミュニケーションを取りに行くタイプの子は活発になったが、きっかけがないとコミュニケーションを取れない子も見られた

成功エピソードの多くは、“みんなで”というインクルーシブな空気作りや、“言葉にさせる・本人に伝えさせる”という勇気あるコミュニケーションの後押しなどが要因になっている

4 気づきの促進- 手話通訳・レクチャーなどによるコミュニケーション活発化 (7/7)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

特に工夫した点・成功したとっておきのエピソードについて教えてください

障害のある子に関しては、自身の特徴やこうしてもらえたら嬉しいなど自分の言葉で伝えたことによりみんなも理解を深めたり、お互い歩み寄る姿が見えた

本番の時に、高校生たちが障害のあるメンバーに声をかけて、一緒に練習していたこと

名前呼びゲームで自分の名前を大きな声で言うこと

通訳をしすぎないこと。回を重ねるごとに通訳なしでも、身ぶりなどを交えて伝えられる場面が増えてきていたので、通訳に入る場面とそうでない場面のバランスに気がつけた

週1回対面で顔を合わせるという、通常よりも頻度の高いリハーサルを組んだこととアイスブレイクに十分な時間を取ったこと、一郎さんをはじめ手話通訳士さんが単なる通訳だけではなくコミュニケーションを円滑にしてくれたこと

間違ってる手話を使ってでも、手話でコミュニケーションをとり続けた点

後半のNHKリハが始まってから特に、作品の詰めのところ、パミリの共有や振付のレクチャーなどでコミュニケーションを誰もが自然に取るようになり、ダンスの制作の過程で「みんなで創り上げる」という意識も向上してきて、仲良くなったところがとても良かったと思います！

障害ダンサーと学生のコミュニケーションを活発に行うため、休憩時間など積極的にコミュニティの輪を作った。また、共通言語である踊りを通して皆で踊るなど積極的に取り入れた

コミュニケーション、仲良くなる事を重視した結果その雰囲気作品にもしっかりと出て団結した姿をお客さんに魅せられたのではないかと思います。1番の成功は、障害があるない関係なく自分の個性を全面的に出した作品でお客様の心を動かせた事、見ている方々に何かしらのパワーを与えられた事だと思います。そして終わった後に全員が達成感で溢れた顔をしているのが見れた事も成功を感じられた瞬間でした

ある学生が、特定の人物が教えたり指示した方が集中できている様子に気がつき、チーム内で共有し、次回以降に不安があったときは、その特定の人物がフォローすることでスムーズにいく場面が多かった

本番の日に、メンバーの強い口調に傷ついてしまったラブリジャンの1人のエピソード。ゲネの待機中に起きました。本番に向け、お互いに気持ちが高ぶっており、その子は傷ついたことを本人に言えず泣いてしまいました。傷ついてしまった気持ちと、それを周りに気づいて欲しいのと両方あったので、まずはゲネの後にゆっくり話を聞き、彼女の気持ちを傾聴し「気づいて欲しい」という気持ちを満たしました。その後「本番を成功させたい」という元々ある本人の強い想いを話し、そのためにはどうしたらいいか一緒に考えました。その後しばらくして、様子を伺っていると自ら声をかけて一緒に2人で練習をしている姿が。本人からも「仲直りできたよ」と報告をもらえました。2人きりで話す時間をとったこと・話をゆっくり傾聴すること・やる気スイッチを押してあげること・使う言葉を噛み砕くことを意識してコミュニケーションをとったエピソードです。

一人一人が理解しやすいワードや視覚的にも情報提示ができるように心がけた

ダンスのレクチャーや構成説明など誰にでも分かりやすく伝えるように説明し心掛けた

今回のプログラムを通じて、個々の人間同士の関係性における“気づき”、ひいてはD&Iに繋がる気づきを醸成できた

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上 (1/9)

サマリ

期中ヒアリング

アイスブレイクやダンスレッスンを通じたコミュニケーションの活発化により、表層的な判断や先入観ではなく内面を含め、人対人で交流するようになり、各々の個性や良さに対する気づきの醸成が見られた

(ADHDのインストラクター：ソーシャルワーカーズ)

期末ヒアリング

個々の動きの違いや、内面・人間性の違いが個性であるという点を言語化するというよりは、「障害」に目や意識が向かず、一対一の人間関係を無意識のうちに、自然と築いていた
(インストラクター)

D&Iの自分なりの定義を押し付けたくなく、あえてどのようなことに気づいてほしいかは言及しないようにしていた。自らが手探りで、自分なりの気づきを持ってほしいと思っていた
(インストラクター)

大人のみなさんが知りえない場面も経験できた。ダンスだけじゃない成長がみれた
(手話通訳士)

期末アンケート

14/14

学生が実際にD&Iに繋がるような気づきを得たと思うメンター/インストラクター

障害の有無・外面的な要素だけでなく、内面までの相互理解が深まった

個々の人間同士の関係性における“気づき”を得られた

定量的にも、D&Iに繋がるような気づきを作れたと実感していることが確認できた

メンター/インストラクターの100%が、学生にD&Iに繋がる気づきをもたらせた実感

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上 (2/9)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

学生は実際にD&Iに繋がるような気づきを得たと思いますか？



- もっと得られたと思う
- 得たが、やや足りなかったと思う
- やや得たと思う
- 十分に得たと思う

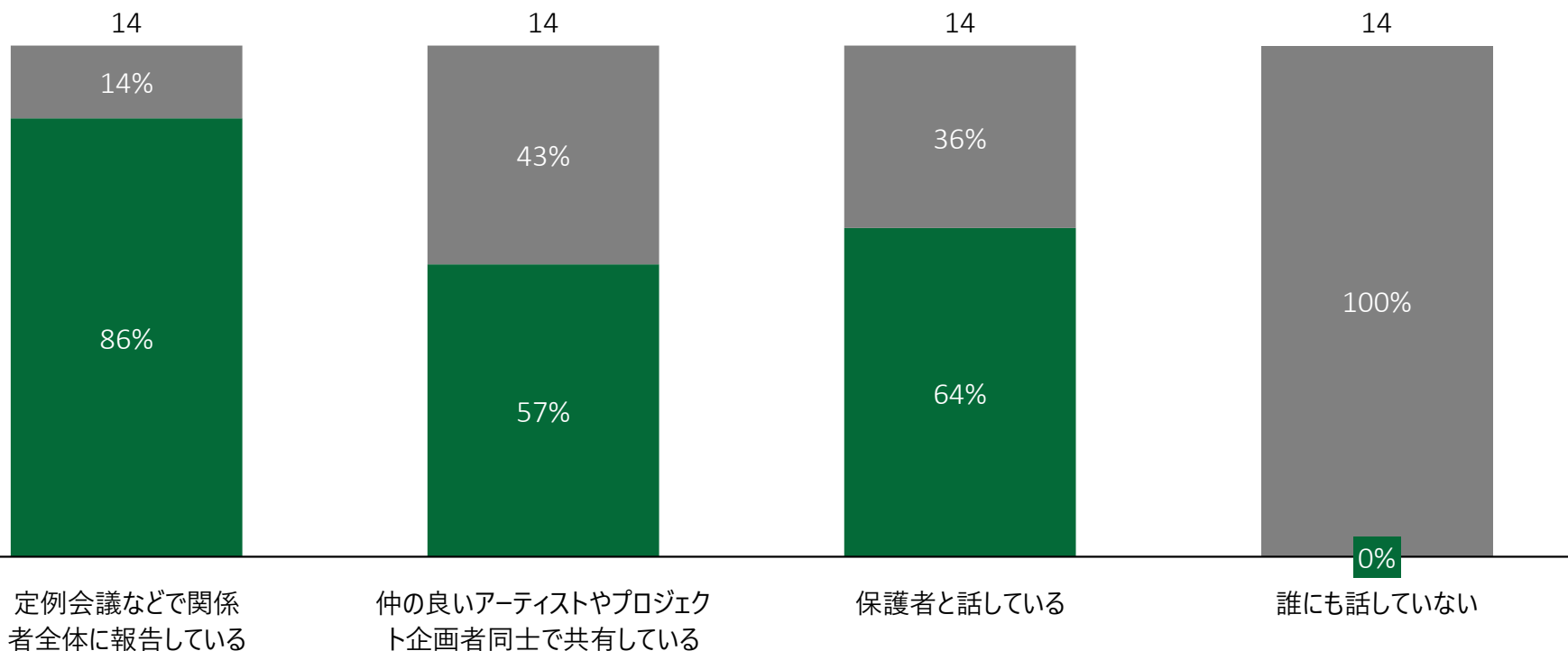
メンター/インストラクターとしての指導力は、定例会議など、関係者全体での報告・共有によって担保されてきた

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上 (3/9)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

様々な課題が出てくると思いますが、他のアーティストやプロジェクト企画者たちと、どのようにコミュニケーションを行っていますか？



合意形成
1 評価目的意義
ロジックモデル
2 評価計画策定
アウトカム測定
スケジュール
3 評価実施
アウトカム
評価プロセス
イベント

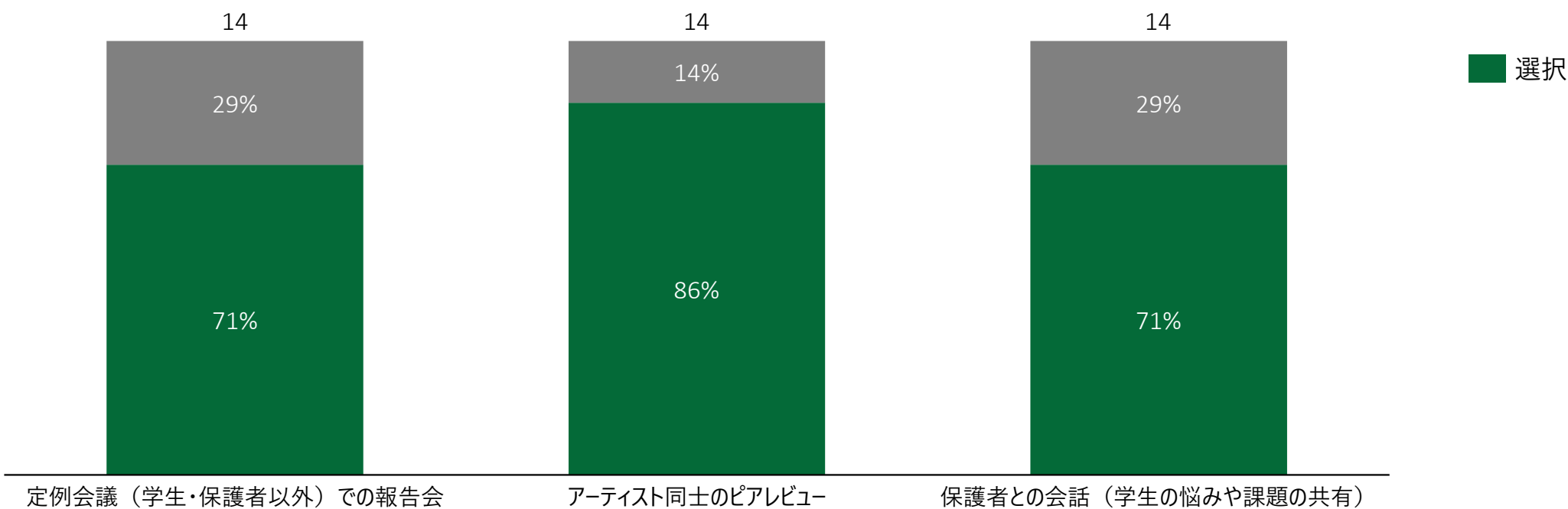
定例会議にとどまらず、様々な意見交換の場・情報交換の場が有効だと思われる

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上 (4/9)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

学生や参加者たちがよりよい時間を共にし、課題を克服していくには、どのような方法が有効だと思いますか？



定例会議やインストラクター同士の会話だけでなく、保護者との会話機会をもっと多く持てばよかったという意見が多数

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上 (5/9)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

その他、ダンスレッスン・学生との関わり方・保護者との関わり方・アイスブレイクの方法など、不安や気になる点があれば、教えてください

どんな人に対しても分かりやすい説明が必要不可欠だと何事も感じた。声の掛け方やタイミングなど関係者や保護者の方含めてより深くお話しできると良かった

練習に保護者が同行している学生たちは休憩中や何かあったときにいつも保護者のもとへ行っていたので、障害のある学生、ない学生に自然と分かれる機会が増えていたことが気になった。年齢や本人の特性にもよるので一概には言えないが、本番当日のように保護者やスタッフ、メンターと一緒にいられない場面もあるので、もっと学生同士で関わる機会が作れたらよかったのか、今回の関わり方がベストだったのか難しさを感じた

最初、保護者の方がどの子の親なのかわからず、挨拶が遅れました。ダンス部員にもそれぞれ課題があったので、それもオープンにして始めたら良いと思います。多様性という意味では、ダンス部員もそれぞれの個性や悩みのある若者です。次回はそこもオープンにして進めたいですね

ダンスレッスン:振り付けを覚えるのに時間のかかる特性のメンバーがいることに対して、時間を別途作るべきなのか、その時間も含め全ての時間を共有すべきなのか。

学生同士の関わり:基本的にはメンターとしては「関わり方のコツや、その子の特性」などは直接的には伝えることはしなかった。自らがその子との関係性で会話する姿を見てもらい、気づいたメンバーが自ら行動に起こせるように意識していた。

保護者との関わり:リハーサルに出向いてくださる親御さんに対して、個別で普段の様子を聞き取ったり、リハーサルでの様子を伝えたりしていた。始めの方では話せる時と話せない時とで偏ってしまい不安にさせてしまったため、できれば毎回のリハーサルで少しでも会話の時間を作れることが必要。

アイスブレイク:毎回のアイスブレイクで緊張がほぐれ、良い関係性を作りやすい雰囲気作りができた。が、気持ちを引き締めたい時までユルツとした空気感も作りやすくなってしまったためバランスを大事に

初めの頃から保護者に普段の様子を聞くべきであった

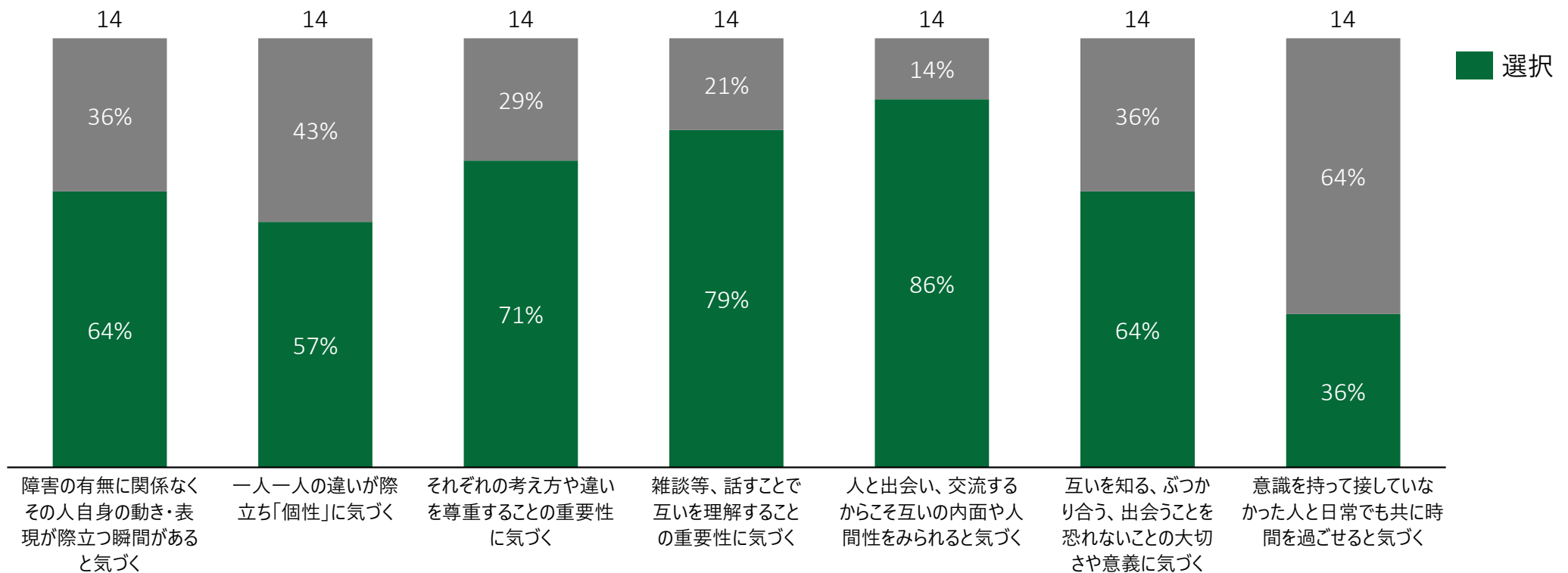
気づきの内容として望ましいものは、人間同士の相互作用による、自己・他者の内面・人間性への発見であった

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上 (6/9)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

D&Iに繋がるような気づきとして、どのようなことに気付いてほしいですか？



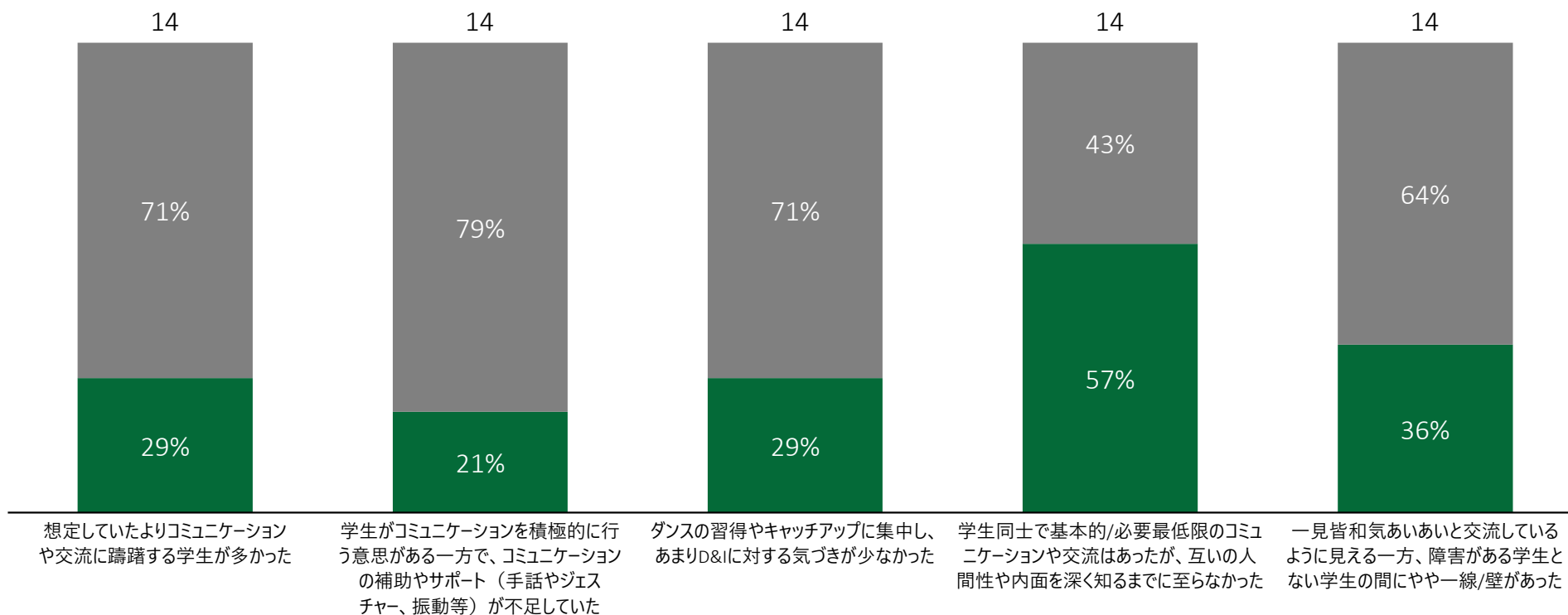
そのような気づきをもたらす上で、やや“深い内面的なやり取り”に課題があった。
共にダンスを作る中で、お互いに自己開示し合うようなやり取りを作ればよかった

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上 (7/9)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

D&Iの気づきをもたらすにあたり、どのような課題がありましたか？



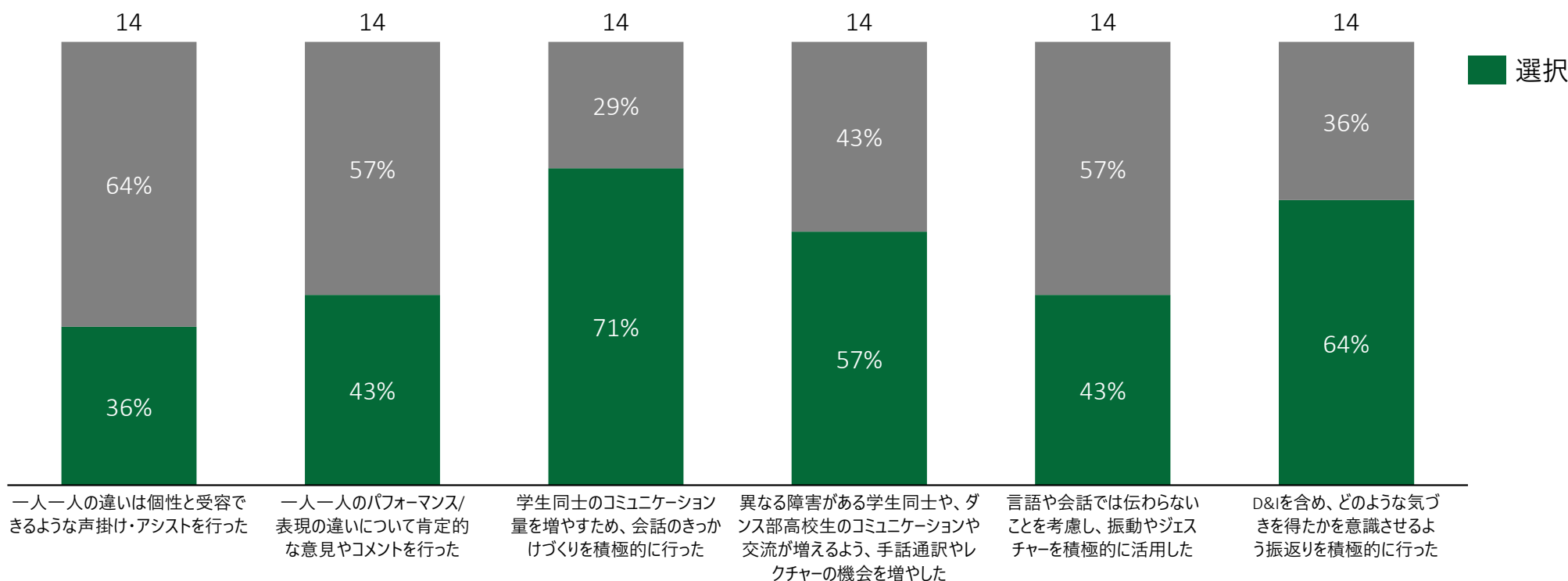
D&Iに繋がる気づきをもたらす工夫としては、やはりコミュニケーション量の増加がポイントと 思われてきた。前頁の内容を踏まえると、その質（深さ・正直さ）なども重要であったか

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上（8/9）

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート（n=14）

D&Iに繋がるような気づきをもたらすために、どのような工夫をしましたか？



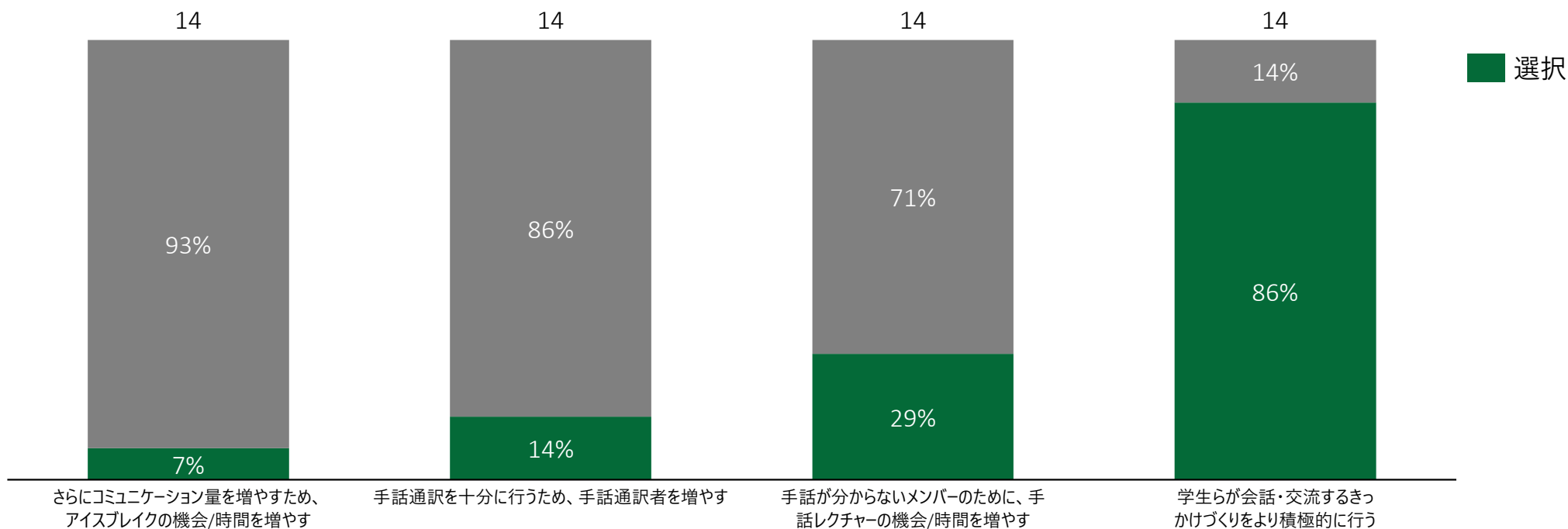
更なる工夫として会話・交流のきっかけ作りが重要か。必要最低限のやりとりや会話といった表層的交流ではなく、互いをもっと知りたいと感じる機会やきっかけ作りが重要と推察

4 気づきの促進- D&Iに対する気づきの指導力向上 (9/9)

運営側の目線

メンター・企画者への期末アンケート (n=14)

学生たちに、D&Iに繋がる気づきを得てもらうために、さらにどのような工夫や改善が必要だったと思いますか？



今回のイベントを通じて、親子の会話が減ることはなく、72%が親子の会話増加を実感することができた

5 前向きな気づきのサポート- 日々のコミュニケーションによる子供の変化への気づき (1/2)

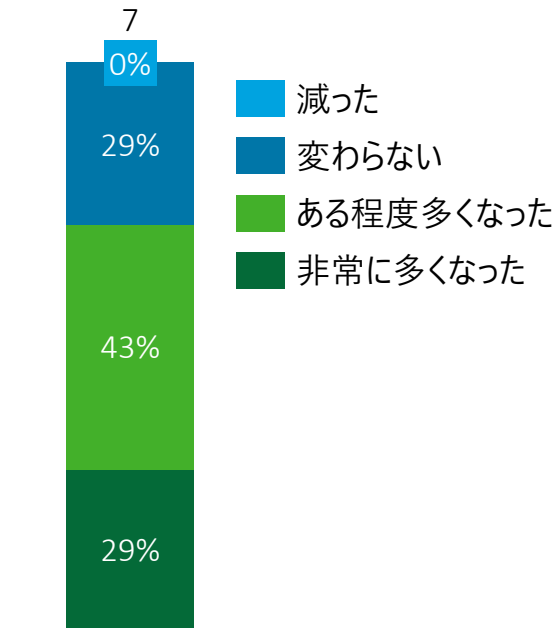
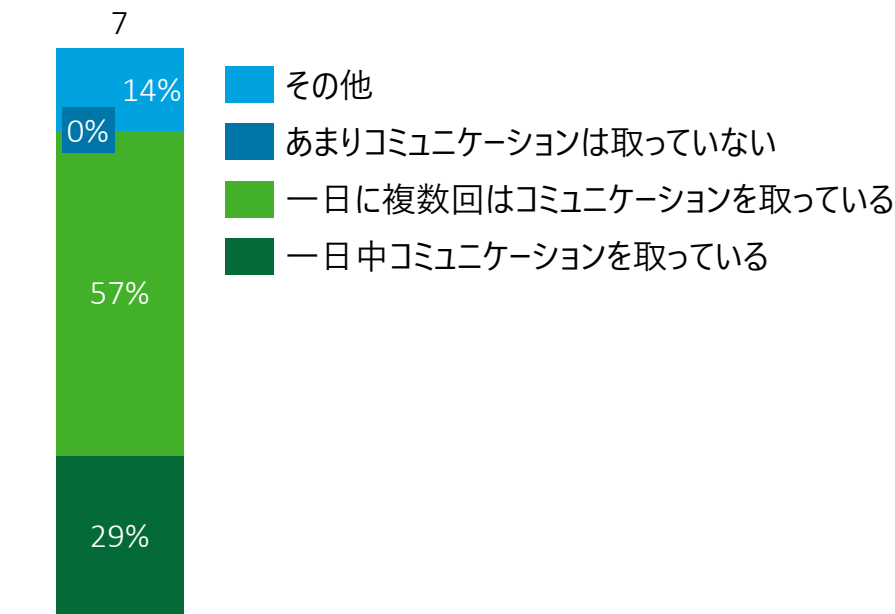
保護者の目線

保護者への期末アンケート (n=7)

イベント前後での変化

今回のダンスプロジェクトに参加する前について、どれほどの頻度でお子さんのコミュニケーションを取っていますか？

今回のダンスプロジェクトの参加期間において、お子さんとのコミュニケーション頻度は変わりましたか？



普段とあまり変わらないという結果もあるが、半数以上が明るく快活になるというポジティブな結果を得た

5 前向きな気づきのサポート- 日々のコミュニケーションによる子供の変化への気づき (2/2)

保護者の目線

保護者への期末アンケート (n=7)

今回のダンスプロジェクトの参加期間において、お子さんにどのような変化が見られましたか？



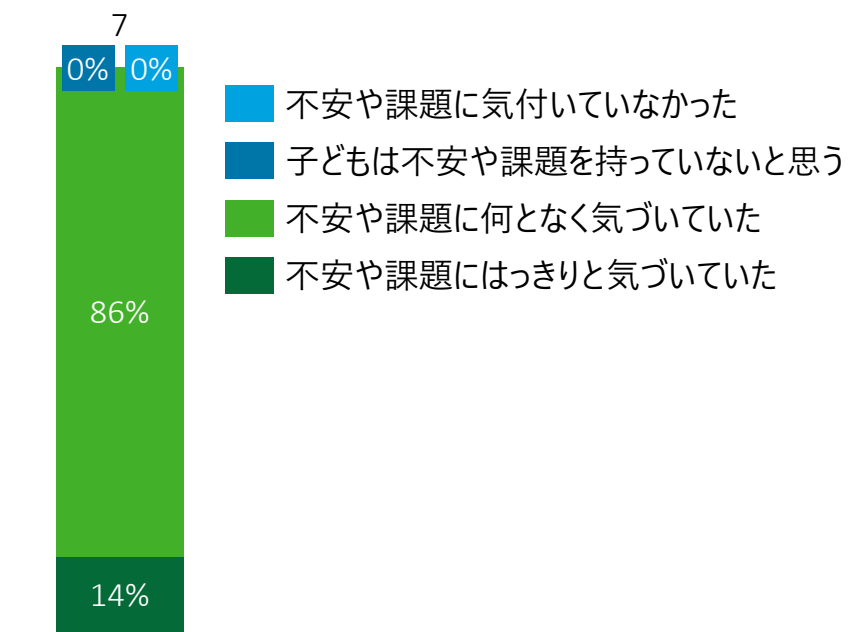
今回のイベントを通じて、親子の会話が増えることにより、親が子の不安や課題に気付くきっかけとなった

5 前向きな気づきのサポート- 子どもが持つ不安や課題感への気づき (1/2)

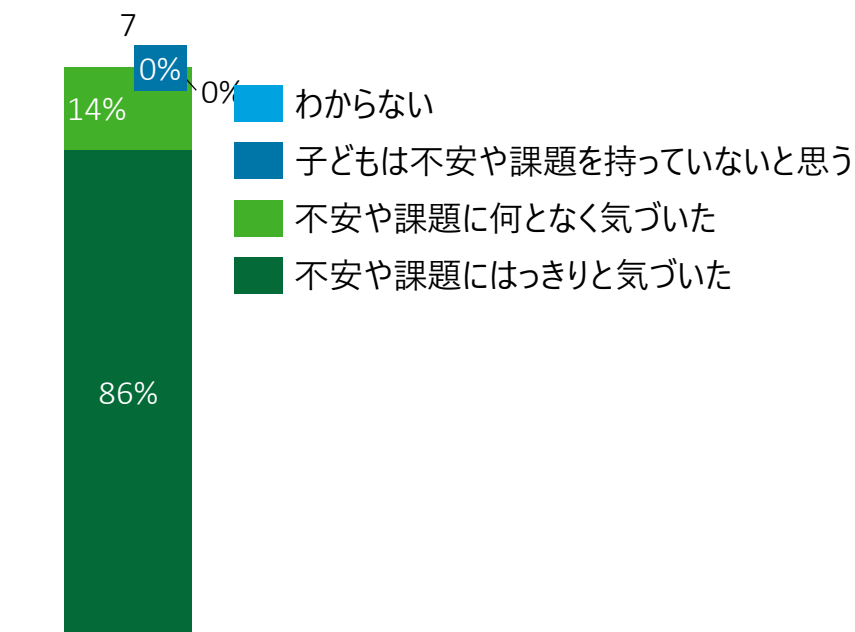
保護者の目線

保護者への期末アンケート (n=7)

今回のダンスプロジェクトに参加する前について、お子さんが感じる不安や課題に気付くことはありましたか？



今回のダンスプロジェクトを通じて、お子さんが感じる不安や課題に気付きましたか？



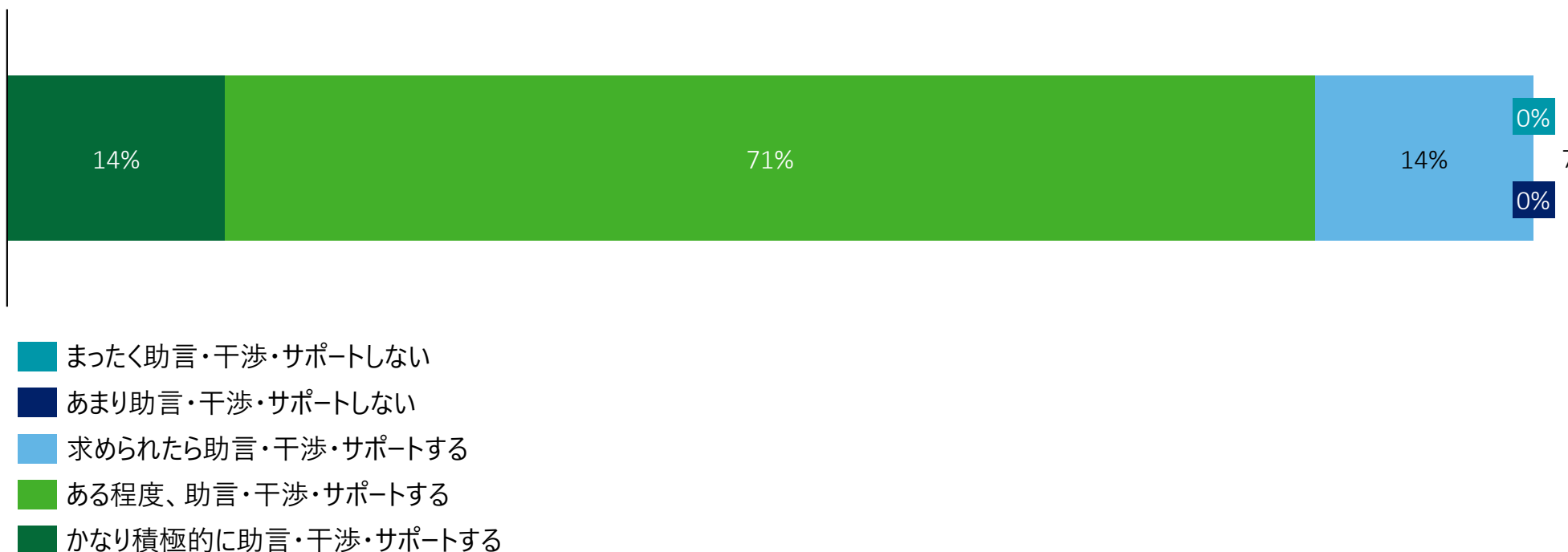
親が子の不安・課題に気付いたとしても、その対応方法は親子関係・家庭環境によって様々な形であることがわかった

5 前向きな気づきのサポート- 日々のコミュニケーションによる子供の変化への気づき (2/2)

保護者の目線

保護者への期末アンケート (n=7)

お子さんが感じる不安や課題に対して、どのようにお子さんと向き合うようになりましたか？



3 - 2. 評価プロセスに対する評価

今回のKPI検証において、アンケート・ヒアリングのデータ取得網羅率に課題があった。 そのため分析結果は大勢を表すものではなく、一部意見に止まることにご留意いただきたい

調査設計・実行の振り返り

実施した調査	回答者・回収方法	回収率	調査方法の振り返り・改善案
期中ヒアリング	イベント期間中、休憩のタイミングで参加学生を中心にヒアリングを行った	15% (6/39人)	<ul style="list-style-type: none"> 参加学生がイベント自体に集中している中、ヒアリングの時間・心理的な余裕があまりなく、KPI評価観点だと、回収率が低かった 調査目的を「イベントの軌道修正」などに変え、不満・不安の収集などに集中するのも有効か
期末ヒアリング	イベント終了という節目で、有志を募り、zoomで1on1のヒアリングを行った	21% (8/39人)	<ul style="list-style-type: none"> 有志を対象にしたため、回収率が低かった 生の声を聴く場として場自体は非常に有効 期末アンケートの分析をクイックに行い、ある程度の傾向や着眼点などを特定した上で、シャープなヒアリングが実施できれば尚良かったか
期末アンケート	イベント終了という節目で、参加学生・メンター・保護者を対象にアンケートを配布して回答を募った	77% (41/53人)	<ul style="list-style-type: none"> 節目を利用し、高い回収率を実現できた 選択肢が「ネガティブな評価をしにくいもの」になっており、若干KPIが上振れした感があるが、 アンケートへの回答自体に振り返りの効果があり、ポジティブな振り返りに繋がったことは評価したい

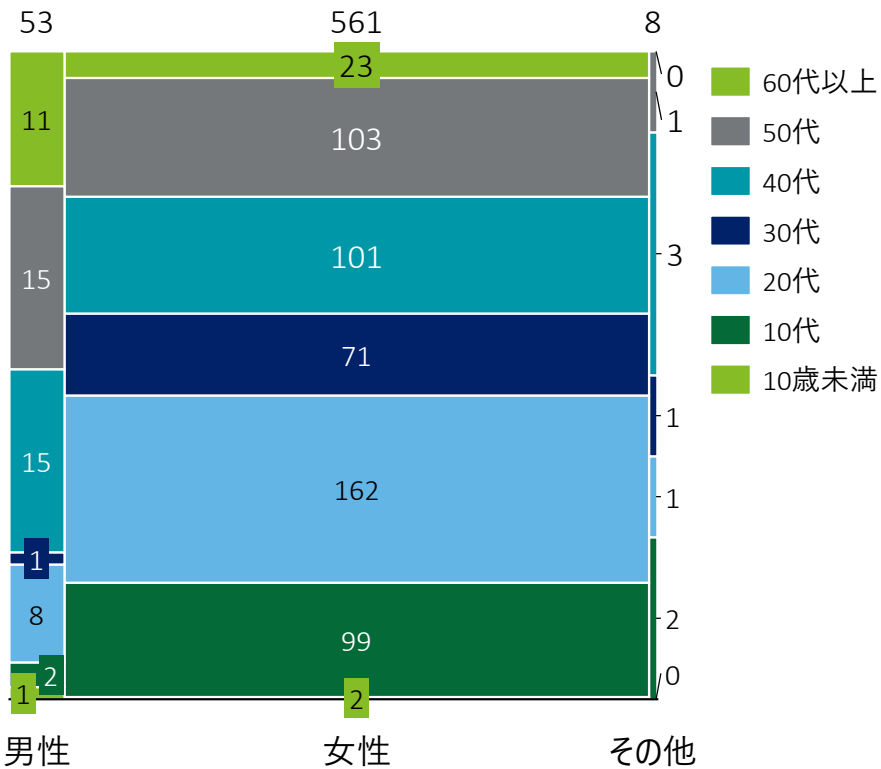
検証精度を高めるためには、「節目=回答するきっかけ」と「時間・心理的な余裕」を踏まえた調査で回収率を上げたい。
また、期末調査は回答自体が振り返りの効果を持つことに留意し、引き続き、前向きな設計を心掛けたい

3 - 3. イベントに対する評価

来場者アンケートの回答者は、9割以上が女性で、年代の大きな偏りはなかった。障害の有無は、9割が障害なしとしているが、1割弱が自身や家族に障害がある人であった

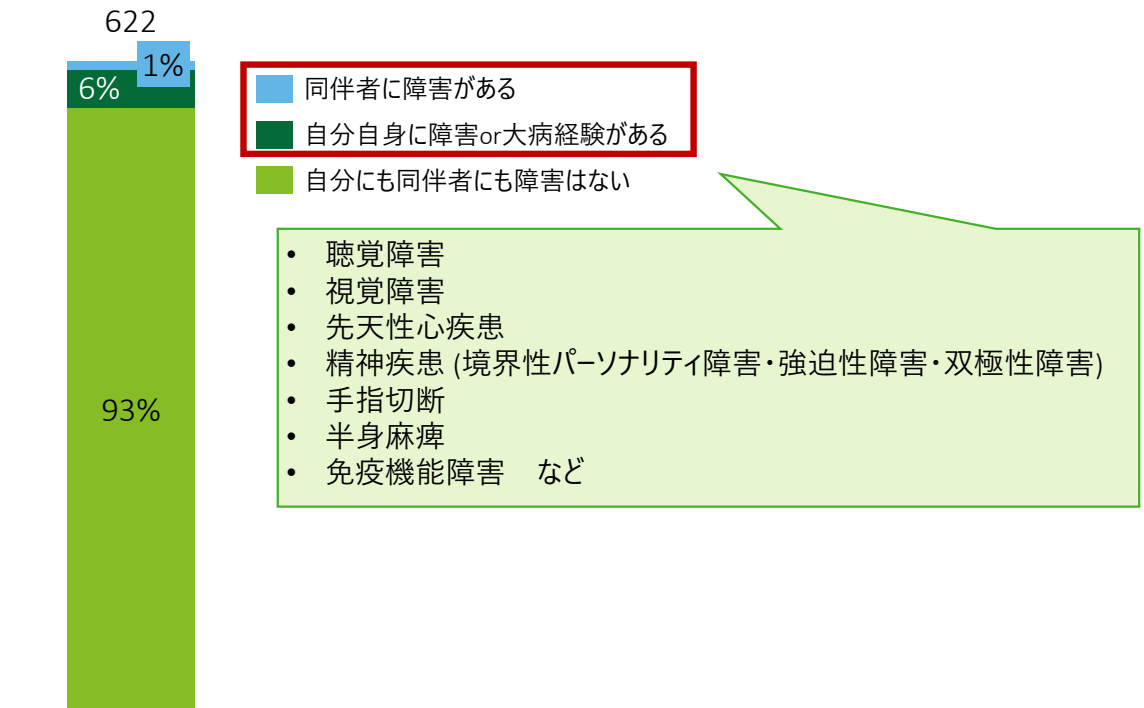
来場者アンケートの回答属性 (n=622)

性・年代



回答者の90%が女性であり、20~50代が多い。
年代別では20代が27%と最大

障害の有無



- 同伴者に障害がある
- 自分自身に障害or大病経験がある
- 自分にも同伴者にも障害はない

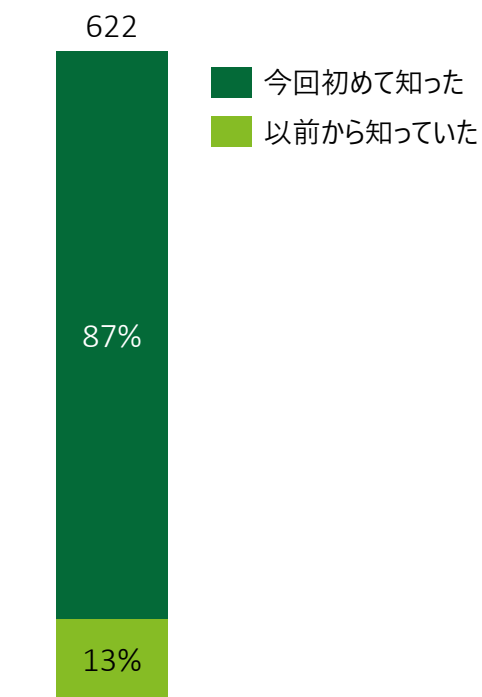
- 聴覚障害
- 視覚障害
- 先天性心疾患
- 精神疾患 (境界性パーソナリティ障害・強迫性障害・双極性障害)
- 手指切断
- 半身麻痺
- 免疫機能障害 など

93%にあたる579名が障害なしだが、6%にあたる38名がご自身に障害もしくは大病経験があり、1%にあたる5名が同伴者に障害があると答えた

TCFを今回初めて知った人が約9割とほとんどで、その認知経路は出演者の告知やメディアの記事などが多く、人気アーティストを起用した効果が非常に大きかったと言える

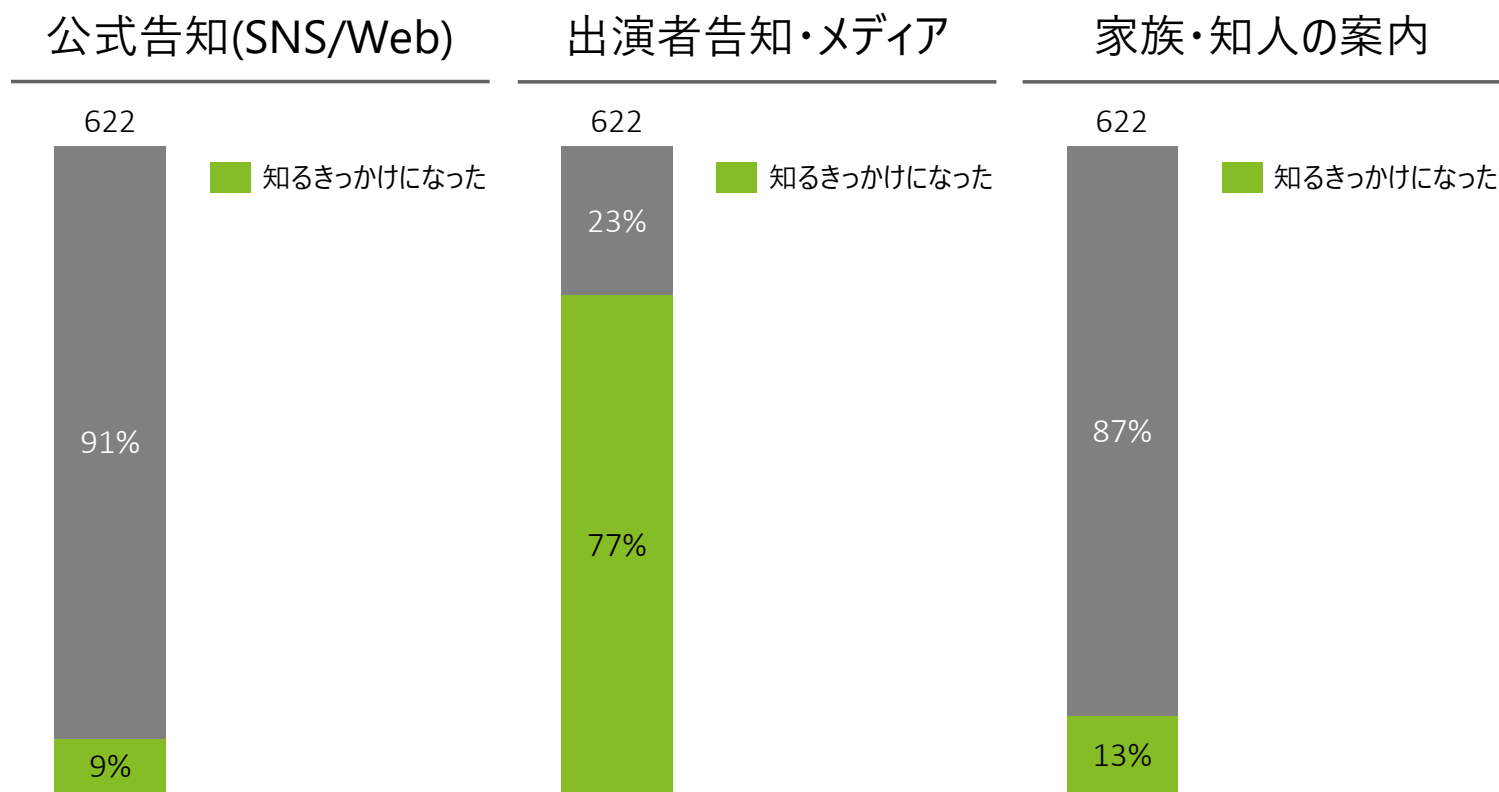
True Color Festivalの認知に関する項目

TCFを認知したタイミング



2019年から開催していたが、9割の方が、今回初めて知った

TCFを認知したチャネル

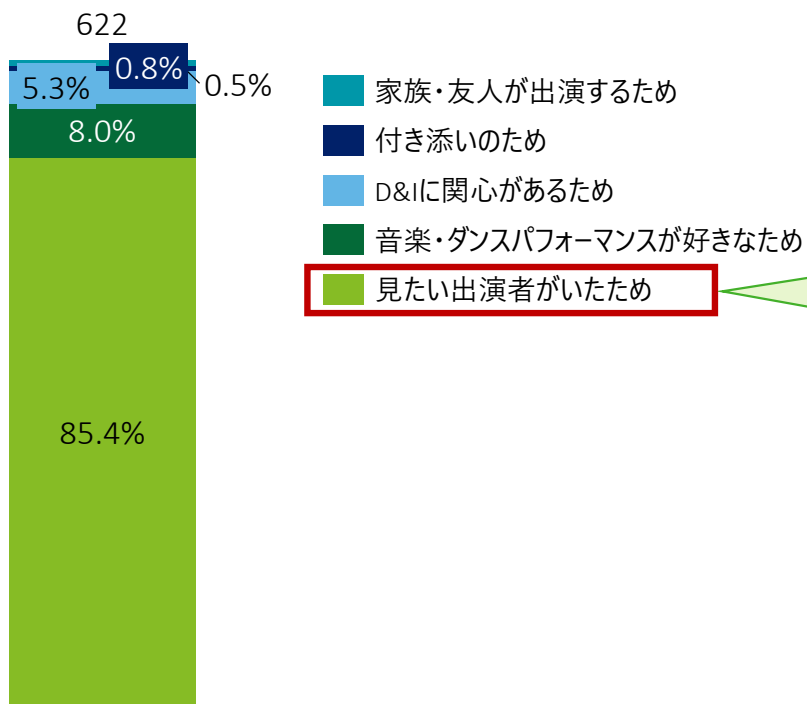


公式発表が知るきっかけになったのは1割のみで、8割近い方が出演者告知・メディアの記事を通じて当イベントを認知した。やはり出演者のメディアパワーは、非常に強い認知獲得チャネルとなっていた

TCFへの来場動機のほとんどが、出演者目当てであり、特に男性アイドル系が人気だった。 このことが来場者の女性比率を高めたと言えるか

True Color Festivalへの来場動機

TCFへの来場動機



「見たい出演者」の具体例

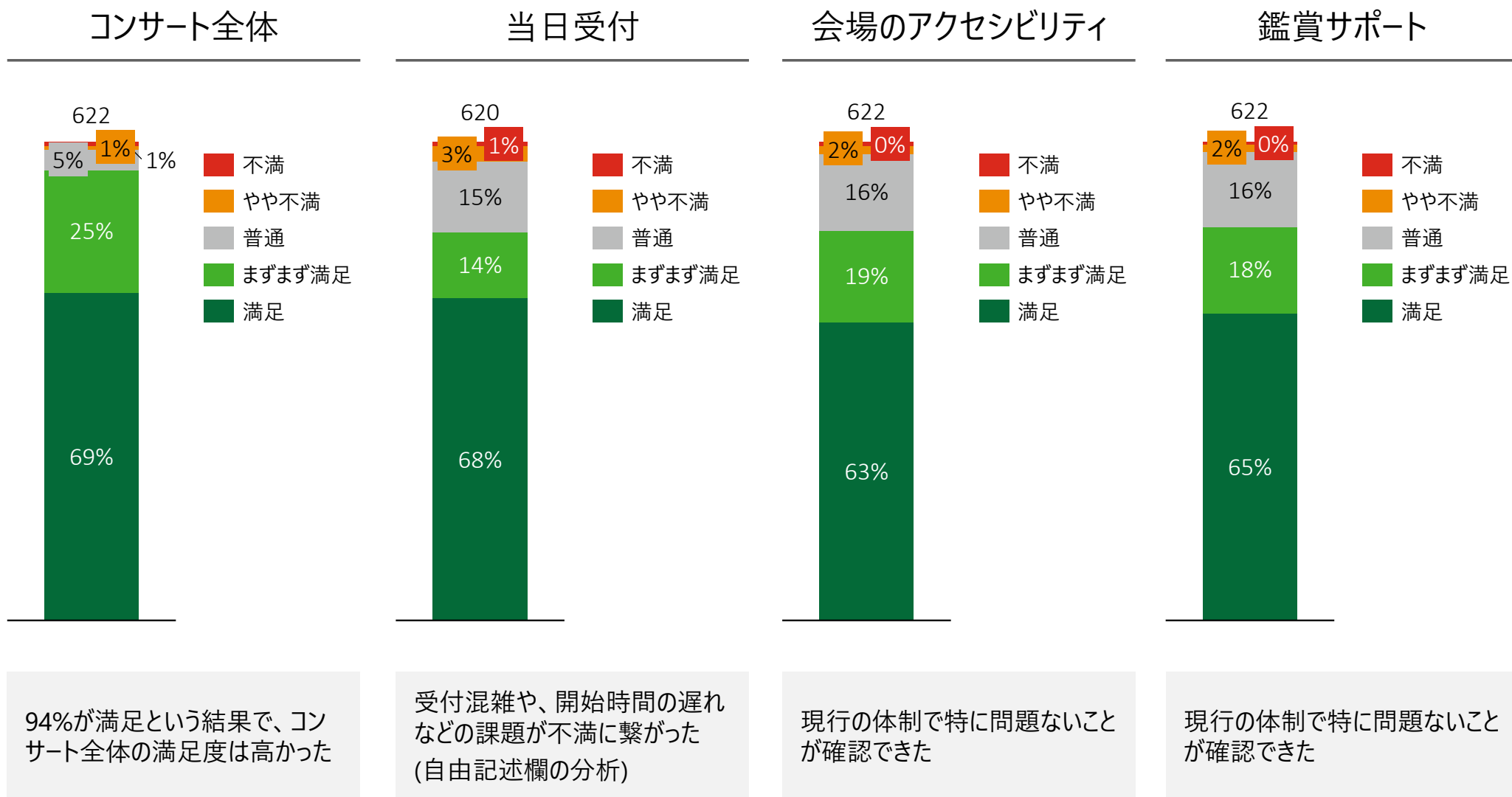
- FANTASTICS (200名以上)
- 超特急 (200名以上)
- 新しい学校のリーダーズ
- 森崎ウィン
- True Color Festivalのダンサー など

8割以上の方が、見たい出演者がいることを理由に来場。
その意味で、元々D&Iへの意識が強くない層が、D&Iという
テーマに触れる新しいきっかけを作ることができたと言える

FANTASTICSや超特急など、アイドル目当てが多く、それが要因となり、P.44の
ような女性比率が多い結果に繋がったと思われる
(またそれら出演者のパフォーマンスへの満足度も高かった)

満足度は概して高い結果となった。自由記述欄と組み合わせて見てみると、開始時刻の遅れなどに対する不満が散見された(以下では“当日受付”のカテゴリが関連)

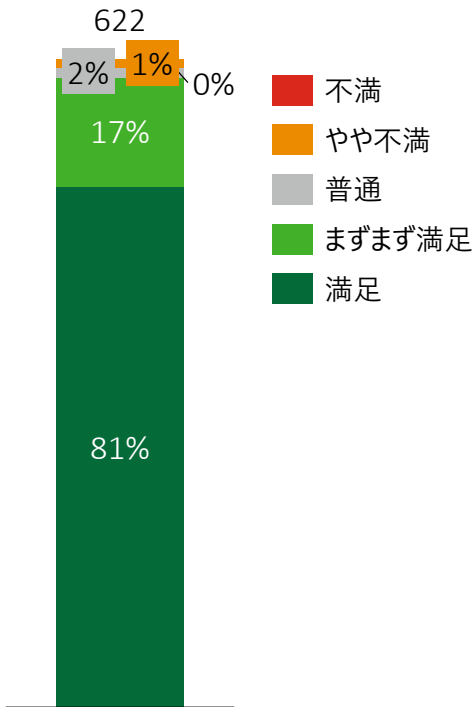
True Color Festivalへの満足度 (1/2) – 主に運営に関する項目



ステージに関連する項目は、出演者・パフォーマンス・構成などでさらに高い評価となった。 自由記述欄と併せて見ると、目当ての出演者が見られたことへの好意的な評価が大きい

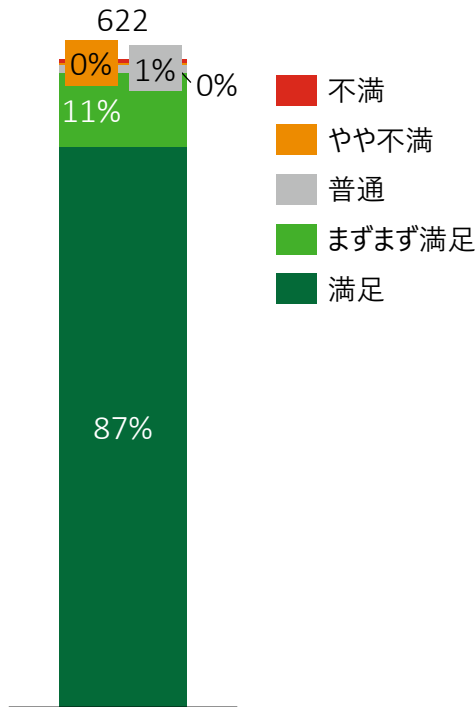
True Color Festivalへの満足度 (2/2) – 主にステージ上に関する項目

出演者



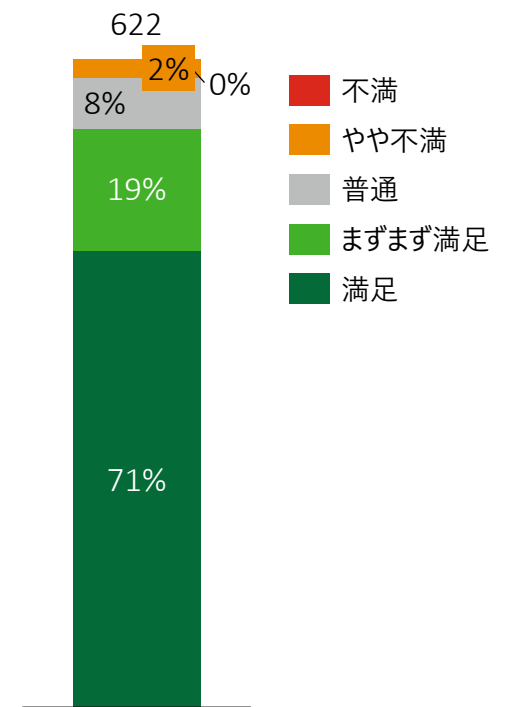
目当ての出演者がいるため、満足度が高かった

パフォーマンス



同じく、目当ての出演者がいるため、満足度が高かった

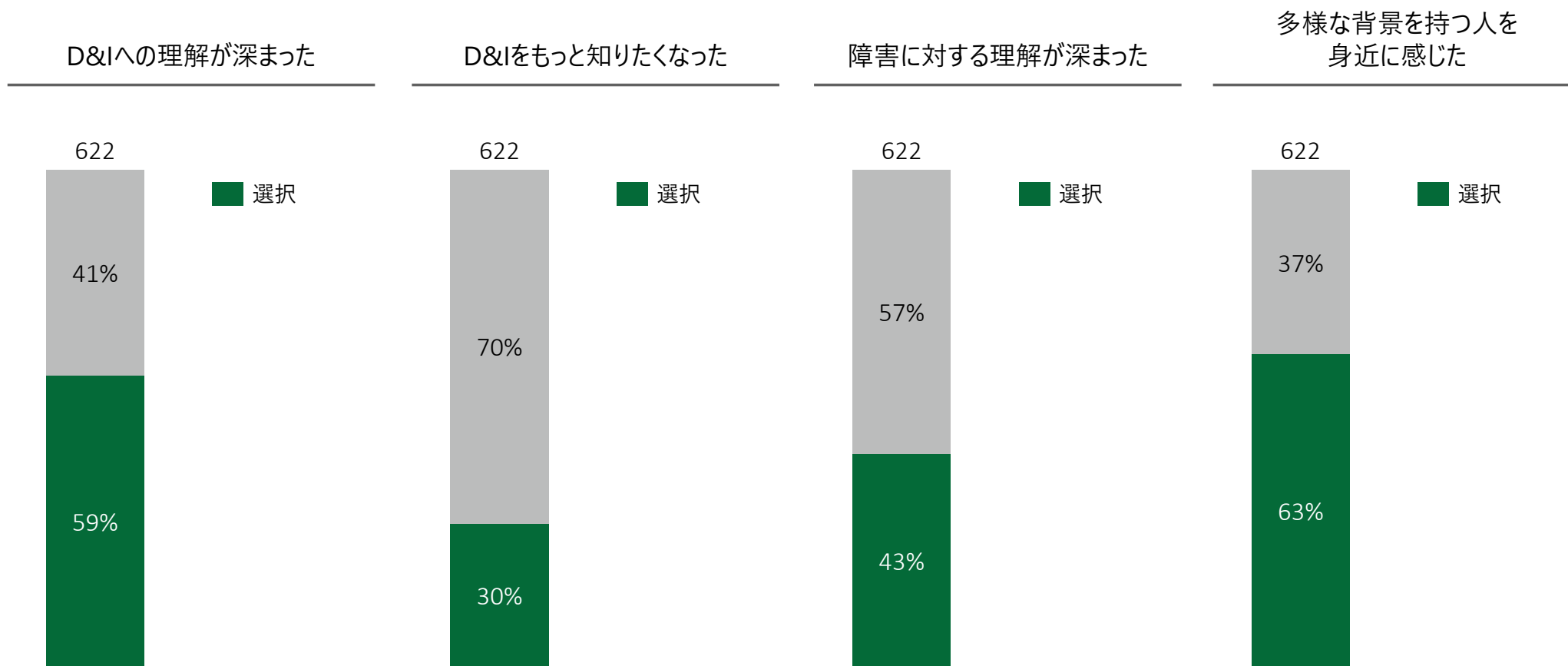
ステージ構成



目当ての出演者がメインではないことが若干の満足度低下に繋がったか...

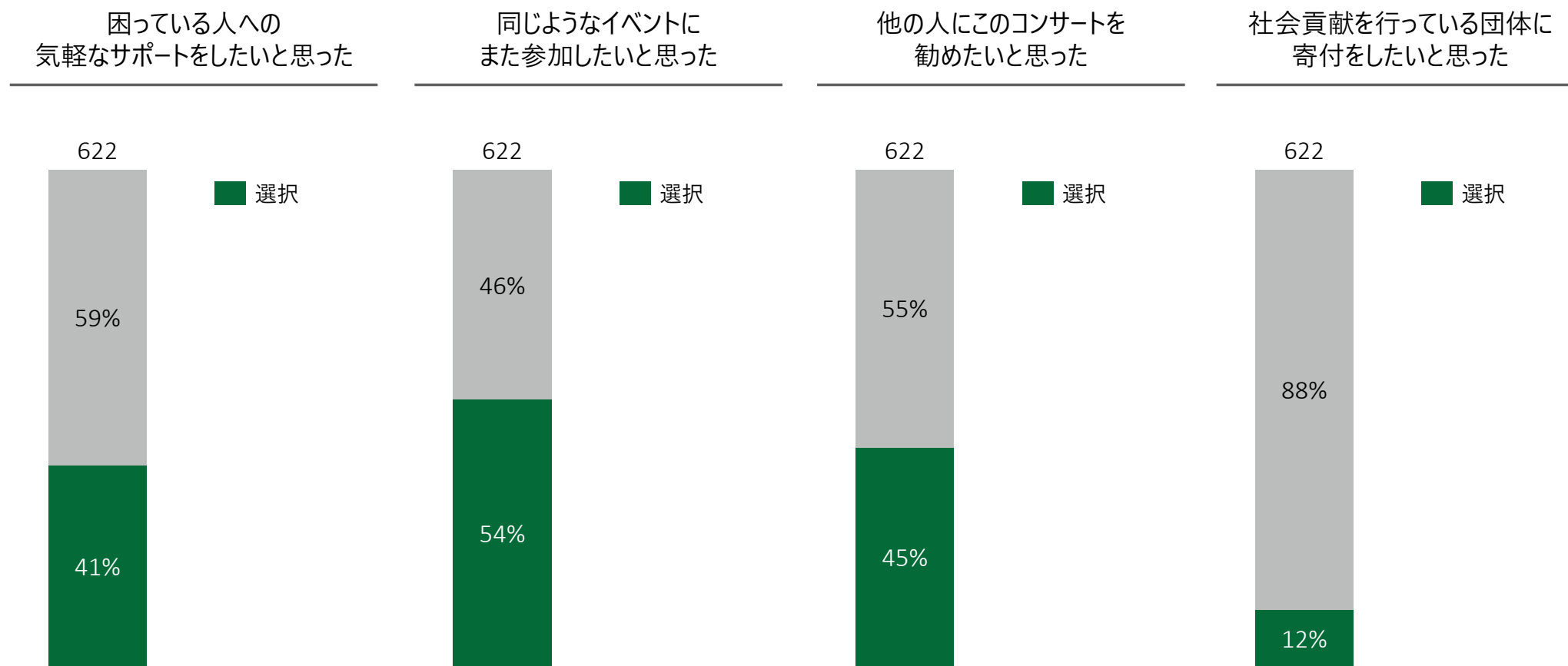
これまでの分析により、“出演者目当て”かつ“今回初めて来場”というエントリー層が多い中、D&Iに関する何かしらの気づきを与えることができたと言える

イベントを通じて感じた自分自身の変化 (1/2)



その他の項目も、ポジティブな変化を作れたことが窺える。また“他人にこのコンサートを勧めたい”という、来場者からの広がり(=気づきの伝播)を生み出せる可能性も一定示唆された

イベントを通じて感じた自分自身の変化 (1/2)



D&Iへの理解促進に繋がる「良かった点」が多数見られた。一方、改善点は多くが運営関連であり、TCFのテーマや考え方などへの批判はほとんど見られなかった

良かった点・改善点 (自由記述のうち抜粋)

良かった点

むやみに「多様性」という言葉を使っておらず、価値観の押し付けと感じられることなく、純粋に楽しめた

エンターテインメントとして純粋に優れており、鳥肌が立った。
演者だけでなく、司会の方も素晴らしかった

耳が聞こえない方向けの拍手 (両手を振る) を知ることができてよかった (意見多数)

手話パフォーマーがかっこよかった (意見多数)

改善点

休憩が1回でもあるとより集中して観覧できたと思う

時々、照明が眩しすぎた (意見複数)

X上でチケットの転売が見られた。
アーティスト目的の人は、出演者によって席を交換しており、気が散った

開演時間が遅れたのは残念だった (意見多数)

前頁と似たような設問だが、ポジティブ面では、「出演者目当てだったが、思いがけずD&Iへの理解・興味が深まった」という非常によい意見が多数あった

自由意見 (自由記述)

ポジティブ

「超特急」(出演アーティスト)を目当てに来場したが、考えを改めるいい機会になってよかった。とてもいいライブだった

「FANTASTICS」(出演アーティスト)目当てで来場したが、出演者の皆様に本当に感動した。好きなことに真摯に向き合い、努力を惜しまない姿に感銘を受けた

QDレーザーで鑑賞し、障害のあるなしに関わらず、本当に楽しめた！

すごくよかった。交流会などがあっても嬉しい

ネガティブ

テレビ放送が60分は短い。もう少し長くしてほしい

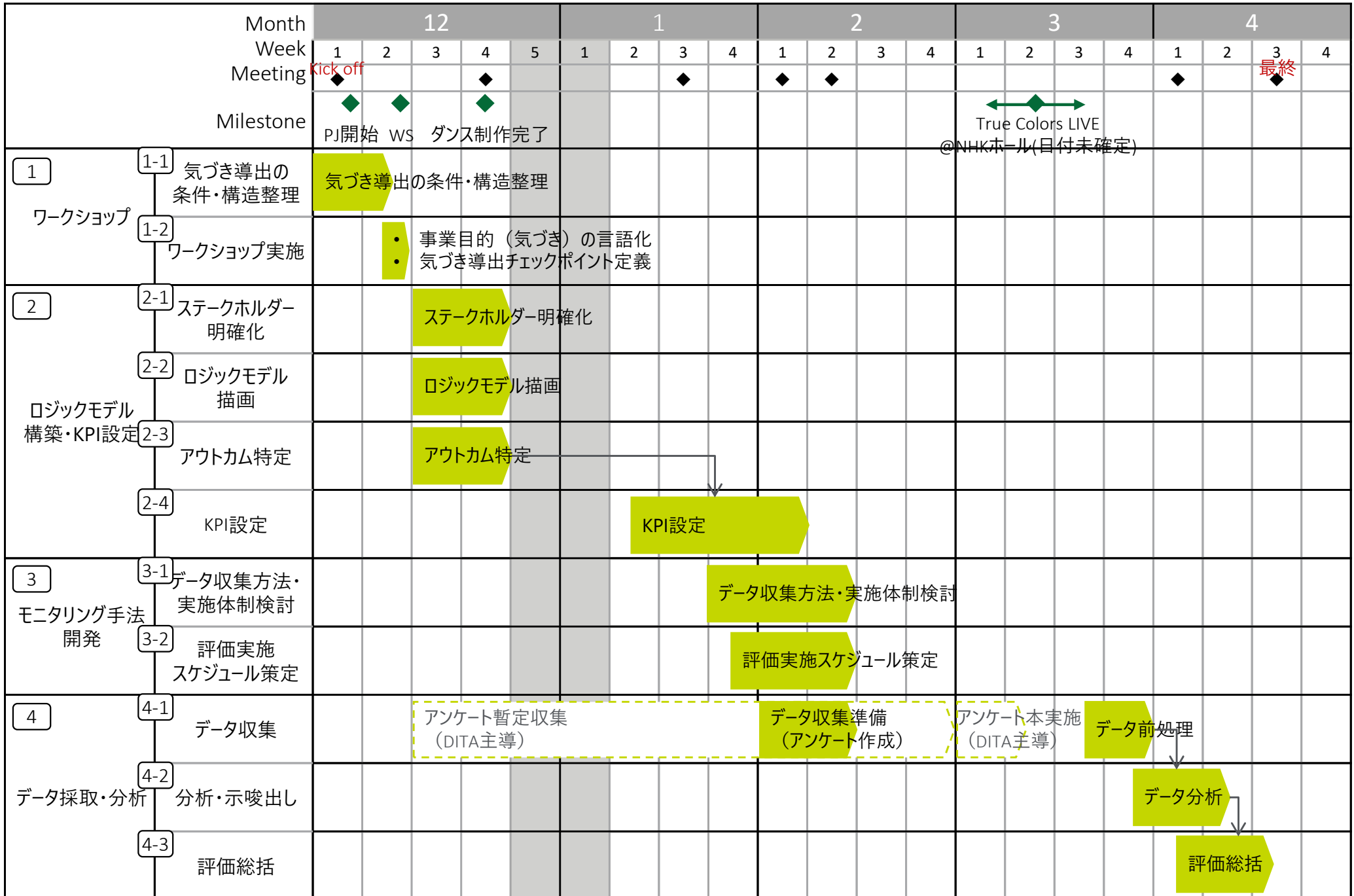
出演者ごとではなく、出演者同士の壁を超えたパフォーマンスがあると、退屈しなくなると思う

2階席に招待席があるのか？名刺交換をしているのを見かけて興奮めした

木曜日なのに21:30終わりというのは、来場者にとって無理がある

APPENDIX 1 : プロジェクトの進め方

当初スケジュール想定（全体）



各回会議アジェンダ

WS開催

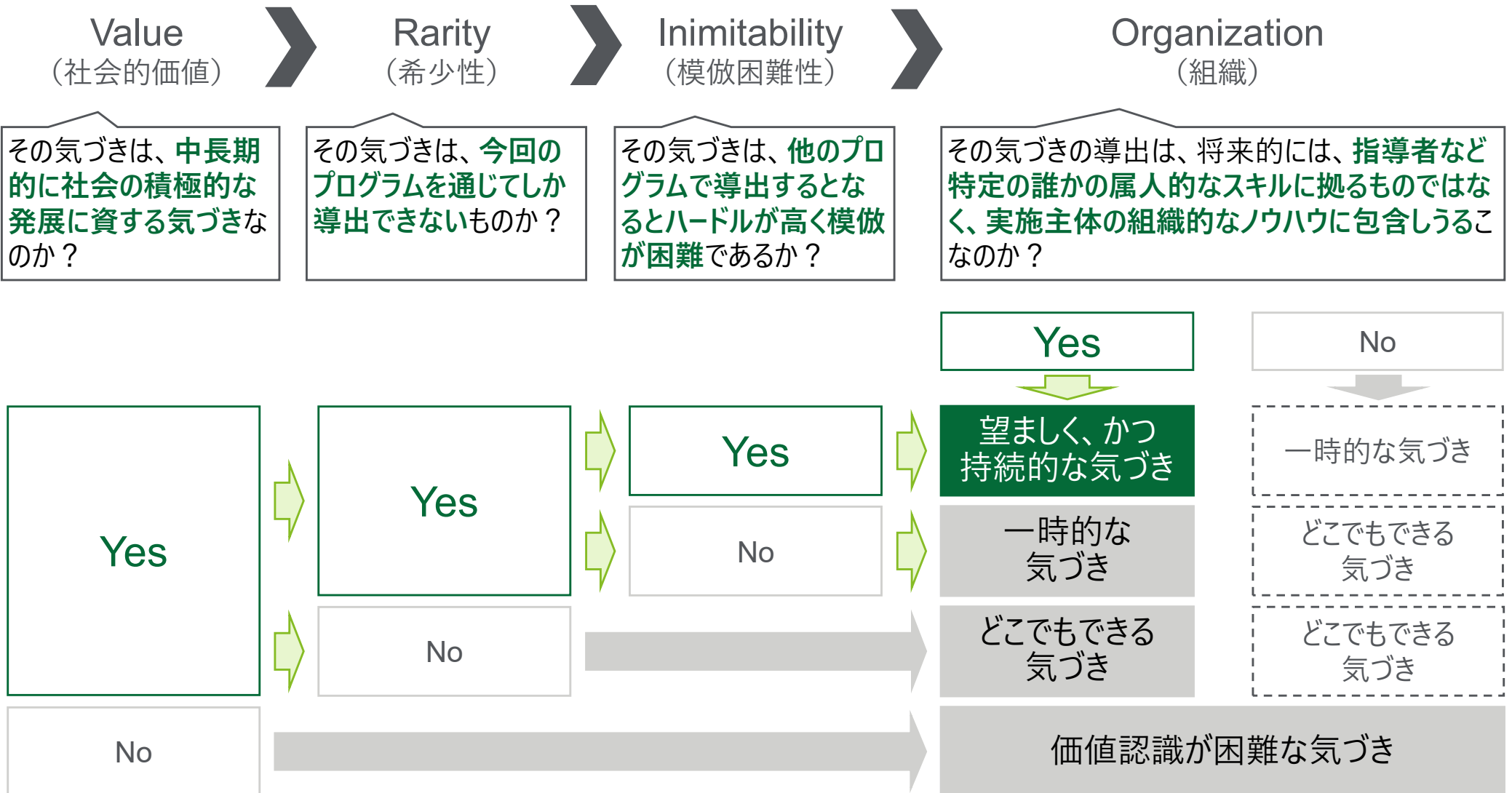
▼ 23/12/11@二重橋ビル

		第1回 (キックオフ) 23/12/21	第2回 23/01/18	第3回 24/02/14	第4回 24/03/13		第5回 (最終) 24/05/14	
メインテーマ		<ul style="list-style-type: none"> ◆ PJの進め方の確認 ◆ 気づきに関する理解促進とワークショップ (WS) のアジェンダ・進め方 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ WSを踏まえた今回事業のロジックモデル構築 (SH明確化・アウトカム特定を含む) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ ロジックモデル確定に関する継続ディスカッション ◆ KPI設定の確認・ディスカッション 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ KPI設定の継続ディスカッション ◆ KPIに係るデータ収集・モニタリング手法および評価スケジュール 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ KPIに係るデータ収集・モニタリング手法および評価スケジュール (継続) ◆ アンケートフォーム 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ データ分析・今回事業評価 	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 今回事業の評価結果 ◆ 総括
会議目的 (討議事項)		<ul style="list-style-type: none"> □ PJの進め方の認識合わせ □ 今回評価のポイントとなる気づきについての整理 □ WSのアジェンダ・進め方の確定 	<ul style="list-style-type: none"> □ WSでの討議内容・決定事項を踏まえたロジックモデル構築・ブラッシュアップ 	<ul style="list-style-type: none"> □ ロジックモデルの確定 □ KPI設定案の確認 	<ul style="list-style-type: none"> □ KPI設定の確定 □ モニタリング手法の確認 (データ収集方法・実施体制含む) □ 評価スケジュールの確認 	<ul style="list-style-type: none"> □ データ収集方法・実施体制の確定 □ 評価実施スケジュールの確定 □ アンケートフォームの確定 	<ul style="list-style-type: none"> □ データ分析および今回事業評価に関する確認 	<ul style="list-style-type: none"> □ 今回事業の評価結果に関する報告およびレビュー □ 今回PJを踏まえた総括
役割分担	タメンタイ	<ul style="list-style-type: none"> • PJの進め方の整理 • 気づき導出の条件・構造整理 • WSのアジェンダ・進め方の整理 	<ul style="list-style-type: none"> • ロジックモデル案の提示 (今回事業のSH整理、アウトカムの特定含む) • (アンケート暫定収集実施への助言) 	<ul style="list-style-type: none"> • ロジックモデルに対する貴財団フィードバックを踏まえた最終化 • KPI案の提示 	<ul style="list-style-type: none"> • KPI案に対する貴財団フィードバックを踏まえた最終化 • KPIに係るモニタリング手法の整理 • 評価スケジュールの作成 	<ul style="list-style-type: none"> • モニタリング手法に対する貴財団フィードバックを踏まえた最終化 • アンケートフォームのドラフト・最終化 	<ul style="list-style-type: none"> • データ分析・評価 	<ul style="list-style-type: none"> • 今回事業の評価・示唆導出 • 総括
	貴財団	<ul style="list-style-type: none"> • PJ進め方の整理に対するフィードバック • 気づきの理解を踏まえたうえでのWSのアジェンダ・進め方に対するフィードバック 	<ul style="list-style-type: none"> • ロジックモデルに対するフィードバック • (アンケート暫定収集の実施) 	<ul style="list-style-type: none"> • ロジックモデルに対する最終フィードバック • KPI案に対するフィードバック 	<ul style="list-style-type: none"> • KPI案に対する最終フィードバック • KPIに係るモニタリング手法に対するフィードバック • 評価スケジュールに対するフィードバック 	<ul style="list-style-type: none"> • モニタリング手法、評価スケジュールに対する最終フィードバック • アンケートフォームに対するフィードバック 	<ul style="list-style-type: none"> • データ分析・評価に対するフィードバック 	<ul style="list-style-type: none"> • 評価結果に対するフィードバック

APPENDIX 2 : 気づきの構造理解

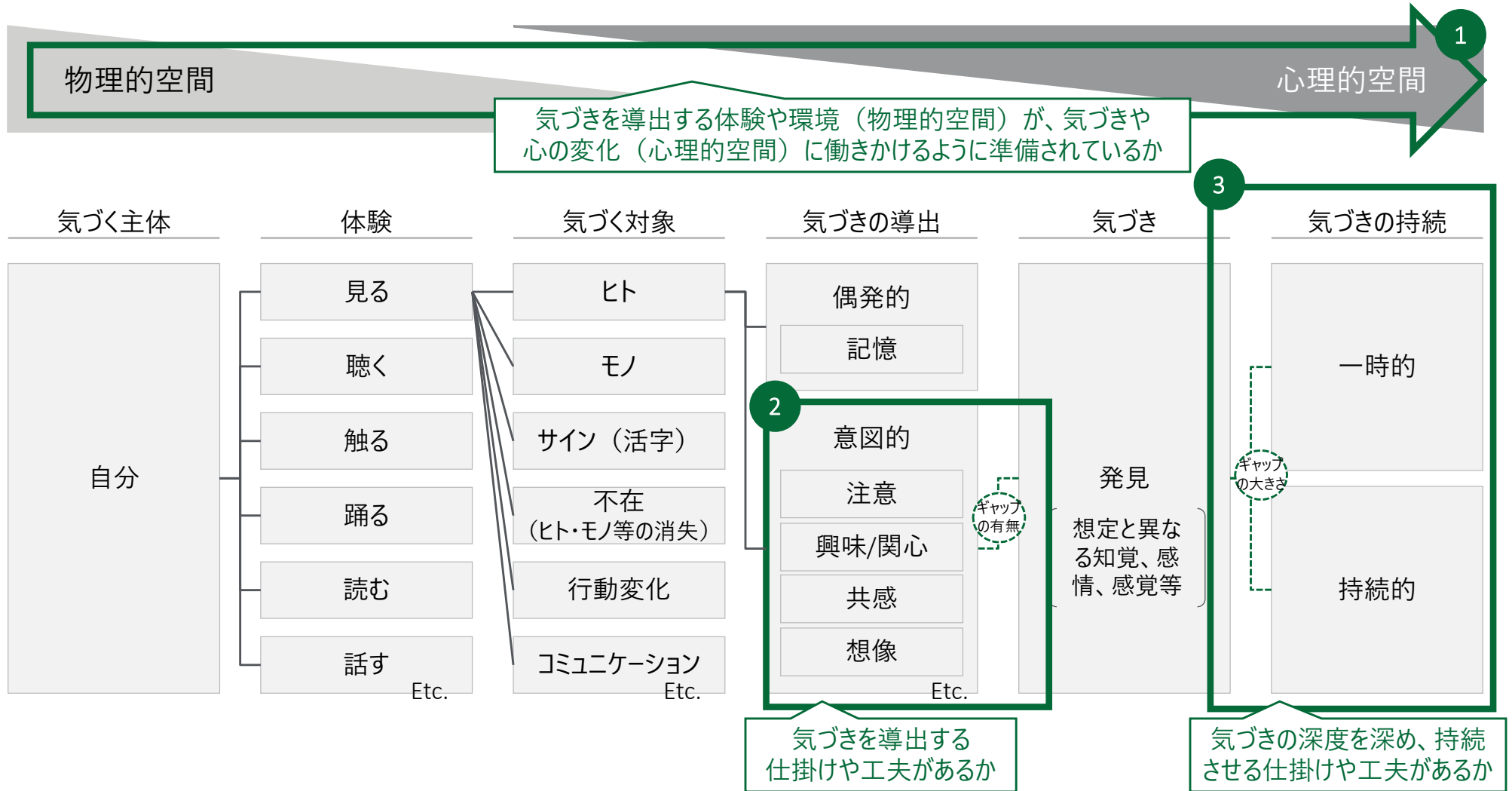
望ましく、かつ持続的な気づきを定義するには、気づきの社会的価値や、本イベント独自に得られるという希少性、模倣困難性、導出のノウハウについて考慮する必要がある

目的とする「気づき」を定義するための4つの条件



チェックポイントの設計にあたっては、気づきの構造理解ののち、深度深く、持続する気づきを導出する仕掛け（チェックポイント）の組み込みを考慮してプログラムをデザイン

気づきの構造（Deloitte理解）と気づき導出デザインのポイント



▶▶ 深度深く、持続する気づきの導出のために、プログラムをどうデザインするか？

APPENDIX 3 : 期中・期末におけるアンケート及びヒアリングデータ

別途Excelファイル参照

CREDIT

イベント主催 一般財団法人 日本財団 DIVERSITY IN THE ARTS

助成 公益財団法人 日本財団

プロジェクト効果検証 タメンタイ合同会社 (TAMENTAI G.K.)

山本 功 | アートマネージャー／代表社員

永井 希依彦 (デロイトトーマツ リスクアドバイザー合同会社 | マネージングディレクター)

渋谷 早弥 (デロイトトーマツ リスクアドバイザー合同会社)

山崎 遥 (デロイトトーマツ リスクアドバイザー合同会社・明治大学大学院経営学研究科)

True Colors Festival 2024 新フェーズ初年度の効果検証に係る助言 報告書

2024年5月発行

発行：タメンタイ合同会社

END OF DOCUMENT